

「聞く側」から「語る側」へ

天授ヶ岡教会 内田 純



あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていない。
I ペテロ 3・15

礼拝、教会学校、バイブルキャンプ、聖会などの説教を聞いた方々の「わかりやすかった」という感想はよくあることです。それはとても大切な要素です。しかし、「わかりやすかった」と「わかった！」では、かなり違うのではないかと思います。本当に「わかった！」と思えるなら、自ずと人にもわかちあえるのではないのでしょうか。いや、わかちあいたくなるのではないのでしょうか。

天授ヶ岡教会の教会学校礼拝は、これまで一人の信徒と牧師がお話をしていました。しかし二〇二一年春から、教会学校に通う子どものお母さん二人にお話しの奉仕に加わっていただきました。さらに秋には青年一人にも加わっていただきました。その青年が奉仕の感想をこう述

べられました。「今までは、教会学校の生徒として、一方的にお話を聞く側だった。しかし、知っていると思った聖書のお話しでも、いざ語るとなるとずいぶん考えさせられる」。その気づきが大切！ 語ることでいろいろわかってくる！ 私は奉仕者のみなさんに、「聖書と共に牧羊者を用いてお話を準備する中で、あなたがわかったこと、恵みだったことを語ってください」と話しています。教会学校は、「語る側」の養いの場でもあるのです。

教会学校に子どもが来ないという課題は、よく聞く話です。私は、そういう今がチャンスだと思っています。できるだけ多くの「語る側」が備えられるチャンス！ 今や子どもだけで集うのは難しい世の中です。ならば教会学校が、親や家族が集う場、くつろぐ場、何でも聞ける場となればよい。そうなると牧師だけじゃ間に合いません。聖書と人に向き合う中で、「わかった！」という喜びを積み重ねた、いろんな世代や立場の兄弟姉妹が必要です。今こそ救霊とリバイバルと教会の建て上げのために、教会みんなが「語る側」として備えられる時なのではないでしょうか。

牧羊者

目次

| | |
|--|----|
| 巻頭言 | 1 |
| 目次 | 2 |
| カリキュラム | 3 |
| 教師養成講座「旧約聖書丸ごと早わかり(3)」 | 4 |
| 十字架と復活 $\Delta 4 / 3 \sim 5 / 1 \nabla$ | 15 |
| サムエルとダビデ $\Delta 5 / 8 \sim 6 / 26 \nabla$ | 45 |
| カリキュラム解説 | 93 |
| 「牧羊者」のご購読・ご利用について | 94 |
| おわりに | 94 |

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

●サムエルとダビデ

光の子として生きる

エペソ 5・8

●十字架と復活

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月3日 進級式

十字架上での
祈り

ルカ 23・32～38

同34節

10日 棕櫚の日

十字架による
救い

ルカ 23・39～43

同43節

17日 イースター

よみがえられた
キリスト

ルカ 24・1～12

同5節

24日

エマオへの道

ルカ 24・13～32

同31節

5月1日

見ないで信じ
る信仰

ヨハネ 20・24～29

同29節

5月8日 母の日 ハンナの祈り

Iサムエル 1・1～20

同17節

15日

幼子サムエル

Iサムエル 3・1～14

同9節

22日

ダビデの油注ぎ

Iサムエル 16・6～13

同7節

29日

ダビデとゴリヤテ

Iサムエル 17・31～51

同47節

6月5日 ペテコステ

聖霊の働き

ヨハネ 16・4b～15

同13節

12日

花の日・
子どもの日・
歩みなさい

エペソ 5・6～14a

同8節

19日

父の日 神の子として

ガラテヤ 4・1～7

同6節

26日

愛の契約

Iサムエル 20・18～42

同23節

旧約聖書丸ごと早わかり(3)

鎌野 直人



はじめに

前回(二〇二一年度Ⅳ巻)では旧約聖書の歴史書をヨシユア記から列王記まで概観しました。今回は、イスラエルの王国の歴史をダビデより捕囚からの帰還までを復習した後、歴史書の残り(歴代誌からエステル記)を概観してみましょう。

I イスラエルの王国の歴史

1 統一王国(紀元前二千年ごろ～926年)

紀元前二千年頃、古代中近東を治めてきた西のエジプト、東のアッシリア、バビロニア各帝国が共に弱体化した結果、イスラエルの民が住むパレスチナ一帯は権力が真空地帯化し、地域の小国がその勢力を伸ばす可能性が生まれてきました。

た。また、地中海から侵入してきた人々(「海の民」と呼ばれる)がパレスチナの海岸沿いに定住し、「ペリシテ人」と呼ばれはじめました。

そのような時代に誕生したのが、ダビデによるイスラエル統一王国です。ダビデの王国はパレスチナ一帯を支配するに至りましたが、海岸沿いのペリシテ人とは平野部と山地部の中間地点を取り合い、頻繁に衝突を起していました。

続くソロモンの治世、イスラエルは東西を結ぶ主要な街道を支配しましたので、諸国との交易を通して繁栄を享受することができ、王宮はよい意味でも、悪い意味でも国際色が豊かなものとなりました。

2 分裂王国(紀元前926年～721年)

しかし、紀元前926年、ソロモンの死後、統一王国はユダ部族

を中心としたユダ王国（南王国）とエフライム部族を中心としたイスラエル王国（北王国）に分裂しました。

北王国は経済的にも、資源的にも優位な領地を持っていた。ただし、宗教面では神殿のあるエルサレムを都とする南王国にかないません。そこで、北王国最初の王であるヤロブアムは王国の南の端ベテルと北の端ダンに礼拝所を建造し、そこにイスラエルの神をあらわす像として金の子牛を置き、その前で犠牲をささげました。宗教的にも民を北王国に留めようとしたのです。

オムリ一族（アハブなど）が北王国を治めていた紀元前9世紀前半、地中海沿いのフェニキアとの深い交易関係のゆえに、王国は経済的に栄えました。しかし、フェニキア土着の宗教であるバアル礼拝が北王国に積極的に導入された結果、宗教的には暗黒時代に入りました。ただし、この時代に活躍したのが預言者たちです。

紀元前845年にエフォーによってクーデターが起こり、オムリ一族による王朝は終焉を迎えました。それと同時に、メソポタミア北方のアッシリアはその力を回復し、パレスチナにその侵略の手を伸ばしてきました。ただ、アッシリアの力が一時的に弱っていた紀元前8世紀前半、ヤロブアム二世の頃、

北王国は経済的な繁栄を享受することができました。

紀元前745年にティグラト・ピレセルがアッシリアの王として即位した後、アッシリアはパレスチナに再度その勢力の手を伸ばしてきました。北王国はアラムと連合を組んでアッシリアに反抗しましたが、その試みは失敗に終わり、ついに帝国の属国となります。ティグラト・ピレセルの死後に北王国は反乱を企てましたが、企ては失敗しました。その結果、都サマリヤは紀元前721年にサルゴンの手によって陥落し、人々はアッシリアへと捕囚されました。北王国の滅亡です。

3 ユダ王国時代（紀元前720年～586年）

北王国が波乱万丈の歴史を送っている中、南王国は山中に位置していたため、他国からの侵入が少なく、比較的安定な歴史を送り、ダビデ一族の王が継続して国を治めていました。しかし、紀元前701年、ヒゼキヤ王の時代、アッシリアはユダの町々を攻め取り、ついにはエルサレムを完全に包囲します。しかし、奇跡的にも南王国はこの危機を乗り越えました。

アッシリアはその後弱体化していきます。その結果、パレスチナへの影響力は次第に弱まり、7世紀末のヨシヤ王の時代、ユダ王国は最後の繁栄を享受しました。しかし、その後、エジプトの侵攻により、ユダはエジプトの属国となります。

紀元前605年にバビロンがメソポタミアの覇権を取った後は、ユダ王国はバビロンの属国化と反逆を繰り返します。そして、ついに598年、第一次バビロン捕囚が行われます。バビロンによって立てられた王によって、しばし王国は命を保ちました、再度反旗を翻した結果、586年エルサレムはバビロン軍の前に陥落し、多くの高貴な民はバビロンに捕囚され、ユダ王国の歴史はその幕を閉じます。

4 捕囚とそこから（紀元前586年）

強大な国というイメージをもつバビロンですが、その天下は決して長くはありませんでした。539年、その都バビロンはキュロス王に明け渡され、パレスチナの覇権はペルシアに移ります。そのような状況の中で、エジプトへの侵攻を狙っていたキュロスは、親ペルシアの地域をパレスチナに拡大するため、ユダの人々がエルサレムに帰還し、神殿を再建することを許します。そして、第一次エルサレム帰還が行われ、神殿の再建が進められますが、様々な抵抗によってその基礎工事のみしか完成することはできませんでした。

続くダレイオス王の時代、サマリアの総督たちの妨害に遭いつつも、捕囚から帰還した民は神殿を再建します（515年）。更に、アルタクセルクセス王の時代、エズラとネヘミヤの指

導の下、エルサレムの城壁が築き直されます。そして、モーセの律法に則った統治を行うことにより、中心都市エルサレムをもつペルシア帝国の一州としてユダヤはその独自性を発揮できるようになりました。

この時代、多くのユダヤ人が各地からエルサレムに帰還しましたが、帰還せずにそれぞれの地に残って過ごす者たちも多くありました。そのような人として特記すべきはエステルとダニエルです。

II 歴代誌Ⅰ、Ⅱ

（内容）

先に学んだ列王記Ⅰ、Ⅱには、バビロン捕囚の観点から、イスラエルならびにユダが滅びた原因が詳しく綴られています。その一方で、ここで取り扱う歴代誌Ⅰ、Ⅱは、ほぼ同じ時代を記述していますが、バビロン捕囚から帰還し、神殿とエルサレムの再建に取り組んでいるユダの民に向かって、これからどのような民となるべきかに焦点をあてています。また、神殿に関する記事に多くのスペースを割く一方で、ダビデ王の罪とその影響や北王国での出来事の多くが割愛されている点もサムエル記Ⅰ、Ⅱ、列王記Ⅰ、Ⅱと大きく異なります。

(分解)

1 系図(Ⅰ1～9章)

1章はアダムからノア、そしてアブラハム、イサク、イスラエルまでの系図と共に、この一族に関わりがある世界諸民族やイスラエル近隣の国々の王の名が掲載されています。2章から8章にはイスラエルの子どもたちの系図が、本来は第四子であるユダから始まり、十二部族すべてについて記されています(ただし、ベニヤミンの系図は二回)。なお、ユダの系図(2・3・4・23)、レビの系図(6章)、ベニヤミンの系図(8章)に多くのスペースが割かれています。それは、これら三つの部族が歴代誌Ⅰ、Ⅱにおいて、さらには捕囚から帰還後のエルサレムにおいて重要な位置を占めていたからだと考えられます。なお、9章にはイスラエルの人々、祭司、レビ人、門衛の名前が記されていますが、これらは捕囚から帰還して、エルサレムに定住した人々のものと考えられます。

2 ダビデによる神殿建設準備(Ⅰ10～29章)

初代の王サウルの死を受けて(10章)、ダビデは全イスラエルの王として即位し、すぐさますべてのイスラエルの民と共にエルサレムを取り、そこを都としました。続いて、彼はキルヤテ・エアリムに置かれてある神の箱をエルサレムに運ぶ

計画をたてました。しかし、神の民心にかなった神の箱の運び方ではなかったため、その計画は失敗に終わり、神の箱はしばらくオベデ・エドムの家に留まることとなりました。その後、ダビデは神の箱をかき上げるべきレビ人を整えて、ついにエルサレムに主の契約の箱をかき上げることができました。レビ人たちはエルサレムで主の箱に仕え、そこで感謝と賛美をささげる一方、祭司たちはギブオンにある主の幕屋に仕え、ソロモンによって神殿が建築されるまでそこで全焼のささげ物をささげました。

ダビデは神殿をエルサレムに建設する計画を立てましたが、神はそれを認められませんでした(17・4)。しかし、敵に対する勝利、ダビデ王家の確立、そして、ダビデの子による神殿の建設を主はダビデに約束され、これらの約束は確かに成就していきました。

人口調査を行ったダビデが主の怒りを買ったことをきっかけに、神殿建設の準備がはじめられました。神殿建設地としてオルナンの所有する打ち場を選んだダビデは、物資と働きびとを備え、ソロモンに神殿を建設するように命じ、彼に油を注いで次の王に任じました。また、レビ人と祭司を組織し、神殿における音楽、門守、倉庫管理などの働きに彼らを任命し、

さらには神殿の細部にわたる計画をソロモンに与えました。

歴代誌Ⅰ、Ⅱを読む時、神殿建設はダビデが計画、準備したものであって、ソロモンはそれを忠実に実行に移したに過ぎないことがわかります。戦いにおいて多くの血を流したために建設を許されなかったダビデに代わって、平和の人ソロモンが神殿建設を実現したのです(22・8～10)。

3 ソロモンによる神殿建設(Ⅱ1～9章)

王国において地位を確立し、主から知恵と軍備と富を与えられたソロモンは、主のために神殿を、そして自らのために宮殿を建て始めました。ツロの王から資材の援助を受け、イスラエル在住の他国人を労働者とし、エルサレムのモリヤの山に神殿を建設しました。神殿完成後、契約の箱はシオンから神殿に移り、この事に感謝して祭司とレビ人たちは主を賛美しました。その時、主の臨在の栄光が、シナイの荒野において幕屋が完成した時と同じように(出エジプト40章)、神殿に満ちました。

ソロモンの奉獻の祈りの後、天から火が下ってささげものを焼き尽くし、主がこの神殿を受け入れられた事が明らかにされました。そして、主はこの神殿を選び、聖別し、ここでささげられる祈りに耳を傾けると約束してくださいました(7・

12～18)。ソロモンは、モーセが命令したように定例の祭りを守り、父ダビデが定めたように祭司とレビ人にその務めを果たさせました(8・12～15)。

列王記Ⅰではソロモンの心が主から離れていったことが記されていますが(Ⅰ列王11章)、歴代誌Ⅱはこの事については沈黙しています。ただ、彼が他国の指導者たちからの称賛を受け、富と知恵においても誰にも劣らない者となったことのみを記しています。ただし、主から翻った時に起こる災厄についての主の言葉は記されており(7・19～22)、この言葉は続く王たちの治世において、残念ですが現実となっていくます。

4 ユダの王たち(Ⅱ10～36章)

ソロモンの子レハブアムの愚かな選択によってイスラエルの人々はレハブアムを拒絶しました。ヤロブアムを王として迎えた北王国の部族は「このようにして、イスラエルはダビデの家に背いた。今日もそうである」(10・19)と述べられています。更に、北王国の民が金の子牛を頼み、ダビデの子孫を王とする国に背き、アロンの子孫を祭司とせず、レビ人を主の働きに用いていない、と南王国の王アビヤは非難しています(13・8～10)。主を捨て、ダビデを捨て、エルサレムの神殿を捨てた事こそが北王国の罪です。

南王国はどうでしょうか。ダビデの子孫を王とし、エルサレムの神殿において礼拝を守っていました。また、アサ（14～15章）、ヨシヤファテ（17章）、ヒゼキヤ（29～31章）、ヨシヤ（34～35章）は宗教改革を断行し、主を求め、過越の祭りをを行い、律法の言葉に耳を傾けました。特にヒゼキヤとヨシヤは、ソロモンの栄光の時代に王国を立ち返らせました。しかし、そのような王たちであっても、外国の王と同盟を結び（アサ、アハズ）、北王国の王と共闘し（ヨシヤファテ、アハズヤ）、神殿以外での礼拝を奨励し（ヨラム、アハズ）、偶像崇拜を行いました（ヨアシユ、アマツヤ、アハズ、マナセ）。一度は主に背いていた王が主に立ち返りましたが（レハブアム、マナセ）、当初主の言葉に従順であった王が晩年になって主に背いた例も数多くあります（アサ、ヨアシユ、アマツヤ、ウジヤ）。これらの不従順の結果、女預言者フルダがヨシヤに語った言葉は現実となり（34・23～28）、災厄が王国に訪れます。

最後の王たちの姿は悲劇的です。エホアハズ以降、すべての王は死を待たずに退位させられ、多くが他国へと捕囚されました。そして、最後の王ゼデキヤはエルサレムと神殿の破壊に直面しました（36章）。彼らが主の送られた使者たちの言葉を軽んじ続けたからです（36・15～16）。しかし、70年の荒

廃と安息の後、ペルシア王キュロスがエルサレムの神殿再建を命じる事によって、預言者エレミヤを通して語られた主の言葉が成就しました（36・22～23）。

歴代誌に登場する王たちに起こった出来事に共通するのは、主に従う者には即座に報酬があり、主に背く者には即座に裁きがある、という原則です。ですから、たとえ主に背いていたとしても、それに気がついて悔い改め、自らを低くする時、主は赦しと祝福を与えてくださいます（レハブアムやマナセ）。「もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたに自分を現される」（128・9）とのダビデの言葉が本書を一貫して流れています。

Ⅲ エズラ記

（内容）

エズラ記は捕囚の民のエルサレムへの帰還から始まります。これは、メソポタミアから地中海沿岸を治めていたバビロン帝国が滅び、ペルシア帝国がそれに替わって世界を治め始めた（紀元前539年）から起こった奇跡です。本書は、エルサレムへ帰還した民が様々な抵抗の中で神殿を再建し、さらに律法の書を持えたエズラが帰還して、改革を行ったこと

が記されています。なお、旧約聖書のほとんどの部分はヘブライ語で書かれていますが、本書の4・8～6・8だけはアラム語（ヘブライ語の親戚に当たる言語）で書かれています。

（分解）

1 抵抗の中での神殿の再建（1～6章）

ペルシア王キュロスがバビロン帝国の都を平和裏に占拠した時、彼はエルサレムの神殿を再建し、バビロン王ネブカドネツアルによって奪われた神殿の什器すべてを携え上れとの勅令を発布しました。そこで、多くのユダヤの民、祭司、レビ人はエルサレムに帰還しました。その中には、祭司ヨシユアとダビデ王家の血を引くゼルバベルがおり、彼らは帰還した民の指導者となりました。そして、エルサレムに祭壇がついに築かれ、主への祭りが再開されました。更に、神殿の基礎の工事も完成しました。

ところが、バビロンに捕囚されずに残っていた者たちが神殿の再建を妨げたために、神殿再建そのものの工事はダレイオス王の治世まで延ばされてしまいました。ちなみに、エルサレム復興の働きが妨害されたのは、この時だけではありませんでした。クセルクセスがペルシア王であった時代（ダレイ

オス王の時代の後）にも、町の城壁の再建を止めようとする妨害は起こっています（4・6～23）。エルサレムに帰還した民は幾度にも渡る抵抗に立ち向かわなければなりませんでした。

しかし、ヨシユアとゼルバベルは、預言者ハガイとゼカリヤを通して語られた主の言葉によって励まされ、神殿の再建を再開しました。川向こうの州（ユーフラテス川の西岸の州）の知事たちはこれに反対し、ペルシア王ダレイオスに確認を取りました。ところが、キュロス王の時代に勅令が確かに出されていたことが調査により明らかにされたので、王は知事たちにユダヤ人たちの働きを助けるよう命じました。こうして、神殿は無事に完成し、その奉獻式が執り行われました。

2 エズラによる共同体の復興（7～10章）

アルタクセルクセスが王であった時、祭司の家系にあり、モーセの律法に精通した学者エズラがエルサレムに帰還しました。モーセの律法に従ってユダヤの事情を調べること、王から与ったささげものをエルサレムの神殿にささげること、律法を教え、それによる裁きを実践することが彼に使命として与えられていました。

ところが、エルサレムでエズラを待ちかまえていたのは、民が異邦の女を妻とし、子どもをもうけているという事実で

した。これは律法に反することです。エズラは驚愕し、断食し、着物を裂き、主に祈りました。その祈りにおいて（9・6～15）、エズラは神の恵み深きいつくしみを覚えつつ、ユダの民の犯している大きなことが主に告白しています。祈りの後、群衆はエズラの所に来てその罪を告白し、異邦の妻と子どもたちを追放する契約を結ぶことを誓いました。そして後、民は異邦の女を妻とした人たちを調べ終え、該当した人たちは、妻をその子どもたちと共に離縁しました。

IV ネヘミヤ記

（内容）

ネヘミヤ記にもエズラ記同様にバビロンから帰還したユダヤ人たちがエルサレムを復興していくさまが書かれています。神殿は完成していましたが、まだエルサレムの町の城壁は完成しておらず、律法に則って民の歩みを改革する必要もありました。そこで、ペルシアにおいて高い位にいたネヘミヤがエルサレムに帰還し、改革と復興を実現していきました。なお、本書はネヘミヤが一人称で語っている部分が多くあるため、「ネヘミヤの回想録」と呼ばれることがあります。

（分解）

1 エルサレム城壁の再建（1～7章）

ペルシアの都ササで王の献酌官（食事の毒味役）であったネヘミヤは、エルサレムの悲惨な現状を聞き、主に王アルタクセルクセスの前であわれみを得る事ができるよう祈り求めました。彼の祈りは聞かれ、ネヘミヤは王の許可をいただいて、エルサレムに帰還します。ところが、そこで彼を待ちかまえていたのは城壁の再建に反対するサン巴拉テとトビヤでした。ネヘミヤは当初城壁の再建の願いを秘密にしていたが、後に同胞のユダヤ人に話しました。彼らはその意見を歓迎し、エルサレムの数多くの門の再建に着手しました。

民の協力によって城壁の再建は進みましたが、妨害もますます激しくなりました。そのような困難の中でも、祈りと知恵ある対応によって、ネヘミヤたちは困難な作業に取り組んでいきました。しかし、ユダヤ人の内にも問題がある事が徐々に明らかになってきました。同じ民の間で利息をとって金と穀物を貸していたのです。ネヘミヤは、そのような行動をやめることを進言し、民もそれに同意しました。その後も外部からの誹謗中傷は止まりませんでした。神の助けによって帰還してきた民は52日間で城壁を完成しました。

2 律法の朗読(8~10章)

城壁の完成後、民は広場に集まり、エズラがモーセの律法の書を読むのを聞き、それを良く理解しました。そして、仮庵の祭りを律法に従って守りました。更に、祝福をくださっている神への感謝とその律法に従わなかった自らの罪の告白の祈り(9・6~37)のあと、ユダの民は律法に従うとの契約を主と結びました。

3 ネヘミヤによる改革(11~13章)

その後、住人がたいへん少なかったエルサレム(7・4)に移住を申し出る人たちが起こされると共に、多くのレビ人と祭司が神殿の働きにつきました。ついに城壁の落成式が行われ、民は感謝と賛美と犠牲を主にささげ、大いに喜びました。この日、神殿の働きをつかさどる人々にその役割が割り当てられました。しかし、まだ改革すべき点が多くあることが明らかになりました。異邦人が会衆の中にいる点、レビ人が受けるべき分を得ていない点、安息日を守っていない点、異邦の女を妻としてとっている点です。しかし、ネヘミヤはこれらの問題にも対処し、ついに聖なる主にふさわしい共同体をエルサレムに立てあげていきました。

V エステル記

(内容)

ペルシア王キユロスによる帰還命令の後も、多くのユダヤ人たちはエルサレムに帰還せず、帝国各地に住んでいました。その中にはペルシア帝国の王宮において高い位置を占めるようになった者もいました。エステルはそのようなユダヤ人の一人です。彼女はペルシア王の王妃となり、その地位を用いることによってユダヤの民を救いました。そして、この救いを記念するためにプリムの祭りがユダヤ人の間で祝われるようになりました。本書にはそのいきさつが記されています。なお、エステル記は旧約聖書の中で唯一「神」という語が使われていない書です。しかし、注意深く読み進めるならば、神の摂理のわざをあちらこちらに見いだすことができます。

(分解)

1 アハシュエロスの酒宴(1・1~2・18)

ペルシア王クセルクセスの時代、王宮では王や王妃が主催となつて酒宴が繰り返し行われていました。ある日、王妃ワシュティの美しさを自慢するためにクセルクセス王は彼女を

自分の酒宴に招きました。しかし、それを彼女が拒んだため、王は憤り、彼女が王の前に再び来ることができないように命令を出しました。

しばらくして、ワシユティに對する王の憤りは収まりましたが、王に別の王妃が必要となりました。そこで、新しい王妃を選ぶため、美しく若き処女を都であるスサに王は集めました。その中にエステルがいました。彼女はいとこであるモルデカイに育てられていましたが、勅令により王宮に連れ行かれ、宦官へガイの管理下に置かれました。彼女はへガイに、そして王にも氣に入られて、ついには王妃に選ばれました。ただし、彼女がユダヤ人であることだけは、誰にも知らせませんでした（2・10）。

2 エステルの酒宴（2・19～7・10）

王宮に仕える働きをしていたモルデカイは、二人の宦官が王を暗殺する計画を立てていることを聞き、その事をエステルを通じて王に告げました。その結果、王の安全は守られ、二人の宦官は処刑されました。しかし、王はモルデカイに對して相当の報酬を与えることを忘れていました。

さて、王宮ではアガク人ハマンが権力を持つようになりました。しかし、モルデカイがハマンに敬礼することを拒絶し

たため、ハマンはモルデカイと彼の属するユダヤ人を滅ぼそうと計画を立てます。そして、アタルの月の13日の一日に限ってユダヤ人を殺戮することを許可する勅令が發布されるに至りました。

この勅令が發布されたことを知ったモルデカイは、自らは荒布をまとい、エステルにこの事を知らせ、王のあわれみを請うように彼女に求めました。王からの召しを最近こうむらないので王の前に行くことを躊躇したエステルに對して、「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない」（4・14）とモルデカイは訴えました。そして、エステルは「私は、死ななければならなかったのでしたら死にます」（4・16）の覚悟の言葉をもって答えました。

その三日後、エステルは召しなしに王の前に出ました。しかし、彼女はみずからの願いを王に述べることはせず、ハマンと共に王がエステルの設ける酒宴に出ることだけを願いました。しかし、その酒宴においても彼女は願いを王に告げず、次の日にもたれる酒宴にも同じように出席して欲しいと申し出るに止まりました。

その夜、王と王妃との酒宴にまねかれ、絶頂にあったハマンは、モルデカイを木に掛ける計画を立てました。一方で、

王はどうだったでしょうか。エステルが命をかけて王の前に来たにも関わらず、ハマンと共に二日続けての酒宴に来てくれ、と願うだけであることが気掛かりで、その夜は眠れません。時間潰しに王宮の記録を聞いている中で、暗殺計画を事前に通報したモルデカイなんの報酬もしていないことに王は気づきました。そこで、王はハマンの提案に従い、モルデカイに王冠をかぶらせ、馬に乗せ、大臣によって顕彰させることにしました。ハマンは王が自分に対してこの報酬を与えるものと勘違いし、皮肉にも自分の最も憎むモルデカイをほめたたえる役を果たさなければならなくなりました。流れが変わってきたのです。

エステルによってひらかれた二度目の酒宴において、彼女はハマンが絶滅しようとしているユダヤ人は自分の民であることを王に告げ、悪しきハマンを王の前に訴えました。そしてハマンは自らが備えた木に掛けられ、処刑されてしまいました。

3 プリムの酒宴（8章～10章）

エステルは王に先の勅令を取り消すように願いました。しかし、一度発布した勅令を取り消すことはできないので、先の勅令が指定しているのと同じアダルの月の13日にユダヤ人

たちはその敵にあだを返して良いとの勅令が新たに発布されました。ユダヤ人たちが滅ぼされる日が、彼らの敵が滅ぼされる日と変わりました。多くの敵がその日殺され、翌日もペルシアの都であるスサにおいてユダヤ人の敵が同じように撃たれました。その後、ユダヤ人たちはアダルの月の14日を祝宴の日、プリムの祭りの日と決めました。なお、モルデカイは帝国において王に次ぐ者となりました。

参考文献

Richard D. Nelson, *The Historical Books*, Nashville: Abingdon, 1998.

（※「牧羊者・二〇〇六年度Ⅲ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。）

聖書 ルカ23・32～38

タイトル 父よ、彼らをおゆるしくください

暗唱聖句 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、

自分が何をしているのかが分かっていないのです。

ルカ23・34

目標 キリストの十字架は自分のためであることを知る。

導入

(後藤 真)

教会にはたいがい十字架があります。どうして、十字架があるのでしょうか。イエス様が十字架にかかられたからです。今日は、十字架にかかられたイエス様のことばを受け止めたいと思います。

十字架の刑罰

みなさんは、十字架は何をするためのものか知っていますか。十字架は、罪をおかした人を死刑にするための道具でした。そのころイエス様たちが活動したイスラエルはローマという大きな強い国に治められていました。ローマの法律に背いた人が捕まえられると、裁判にかけられ、それぞれの罪に応じた罰を受けなければなりません。

んでした。

その中でもいちばん重い罰が十字架刑でした。とても悪いことをした人や、ローマに反抗した人が十字架刑を受けました。十字架刑は、死ぬまで時間がかかり、とても苦しい思いをする、いちばん残酷な罰でした。

では、イエス様はそんな罰を受けなければならぬほど悪いことをしたのでしょうか。いいえ、イエス様は一度も罪を犯さなかったのです。何も悪いことをしていない、罪のないイエス様が、他の二人の犯罪人といっしょに十字架につけられたのです。

父よ、彼らをおゆるしくください

イエス様が真ん中の十字架、他の二人がイエス様の右と左の十字架にかけられました。そのときイエス様は言いました。

「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

十字架にかけられ、痛くて苦しくて恥ずかしくてつらいのに、イエス様はまず父である神様にお祈りしたのです。しかも、自分を助けてくださいというお祈りではなく「彼らを赦してください」というお祈りでした。

イエス様が十字架で苦しんでいるのに、イエス様の着物をくじ引きで分け合っていた人たちがいました。イエス様に「神のキリストなら自分を救え」と笑った役人たちが「あなたがユダヤ人の王なら自分を救えと」ばかにした兵隊たちもいました。

それだけではありません。イエス様に罪がないことを知りながら、イエス様を十字架につけることを許した総督ピラトや、イエス様を十字架につけるためにありもしない罪をきせたユダヤ人たち。そして、イエス様が捕まると逃げ出した弟子たちや、イエス様のことを三度も知らないと言ったペテロ。みんな神様の思いが何かを考えず、イエス様のことも考えず、自分のことだけしか考えていなかったのです。

イエス様はこのような、自分のことしか考えない人たち、イエス様を苦しめ、ばかにし、裏切り、十字架につけた人たちのことを思って「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」と祈ったのです。そして、イエス様はすべての人の身代わりとなるために、自分が十字架から逃げ出すことをしないで、最後まで十字架の苦しみを受けるのです。

わたしたちを赦すために

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちも自分のことばかり考えてしまうことはないでしょうか。神様の思いや、イエス様の喜ばれることよりも、自分の得になることや自分が楽しいと思うことを思っていますか。

そのように、神様よりも自分自身を自分の王様にして生きることを「罪」と言います。神様はわたしたちといつもいっしょにいたいのに、わたしたちが神様を嫌がっているのが罪なのです。神様を嫌がっている人は、永遠のいのちをいただいて神様といっしょに生きることができません。

イエス様はそんなわたしたちの罪が赦され、神様と仲直りし、永遠に神様といっしょに生きられるようにするために、十字架にかかってくださいました。十字架の苦しみは、わたしたちが受ける罰の身代わりです。また罪が赦されるためのいけにえです。イエス様の十字架を自分のこととして受け止め、神様の喜ぶことを選ぶようにしていただきましょう。

♪両手いっぱい愛（PW13、新聖歌483、ホ146他）

聖書 ルカ23・32～38 テーマ 十字架上での祈り

序論

(福井文彦)

この箇所は、十字架につけられたイエスを描いている最初の部分で、その最初の言葉は祈りでした(34)。そのイエスの祈りを通して、自らの罪の悲惨に気づき、この十字架のイエスを救い主と受け入れることをルカは求めているのです。

一、いのちを捨てられたキリスト

不当な裁判の結果、イエスの死刑が確定しました。イエスは、刑を受けるために、二人の犯罪人と共に引かれて、着かれたのは「どくろ」と呼ばれている場所」でした。その場所で、イエスは十字架刑によっていのちを捨てられたのです。

イエスが十字架につけられたということは、重罪人として処刑されたということです。ピラトはイエスを取り調べたのですが、罪は認められませんでした。そこで、ピラトは「彼には、死に値する罪が何も見つからなかった」(23・4、14、22)と三度もユダヤ人に訴えたのです

が、彼らは断固として受け入れませんでした。

ピラトは、ユダヤ人たちの「十字架だ。十字架につけろ」(23・21)との脅迫に屈し、死刑を許可したのです。というのは、死刑にはローマの許可が必要だったため、ユダヤ人は死刑を執行することができなかったからです。イエスの上に人々の罪が置かれ、神により罪のないお方が重罪人と定められ、イエスは死んでくださったのです(Ⅱコリント5・21)。これが、イエスが十字架上でのちを捨ててくださった意味です。

二、十字架は救いのため

イエスは「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」(ヨハネ10・11)と言われました。それに続いて、「だれも、わたしからののちを取りません。わたしが自分からののちを捨てます。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります」ともおっしゃいました(ヨハネ10・18)。イエスが十字架上でのちを捨てられたのは、自発的にご自分のちを捨てられたということです。

議員たちもあざ笑って、「あれは他人を救った。：自分を救ったらい」と嘲りました。しかし、十字架は

人々の救いのためであるということをご承知で、イエスは自分を救われなかったのです。

さらに、イエスの十字架は、すべての人の救しのためであるということです。それを示すのが〈父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです〉という、十字架上の最初の言葉です。〈彼ら〉とは直接には大祭司やパリサイ人であり、ローマの兵隊です。しかし、パウロは「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず」(ローマ3:23)と言っています。ですから、イエスの十字架は、すべての人の救しのためなのです。

三、十字架による罪の赦し

十字架は、ローマの処刑方法の中でも特に大きな苦しみを与える極刑でした。釘付けられた者は致命傷を与えず、激痛と疲労に何時間も苦しみ、多くの者は狂い死にしたと言われています。

しかし、ルカは、イエスの肉体的苦痛にひとことも触れていません。むしろ、イエスがエルサレムの女たちに、「わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい」(23・28)と

言われたと記しています。ルカは私たちがイエスの肉体上の苦痛に目を奪われ、同情の涙を流すことを求めています。むしろ、私たちが、自らの罪の悲惨とその恐ろしい結末に気づき、この十字架のイエスを救い主として受け入れることを求めているのです。

32〜49節には多数の人々が登場し、それぞれが主の十字架に対する自分の態度を明らかにしています。ルカはこれらの人々の態度を、無知な態度として捉えています。彼らは、イエスが自分を救わず他人を救うのみであることを嘲っているからです。イエスが救うのは、単なる「他人」ではなく、彼ら自身であることに気がつかないのです。イエスは彼らの罪の救しのため、十字架にかかれたのです。このような大きな犠牲と深い愛をもって、救いのために祈られたのです。

結論

毎年のように教会学校や教会の礼拝において語られる箇所です。しかし、大切なことは、罪を悔い改め、イエスを私の救い主と信じ、罪の赦しの御霊の証しと新生の経験をいただき、新創造されることです。

研究資料

(宮澤清志)

本日より、新しい年度がはじまる。主がこの年度、私たちに何をして下さるか、期待しつつ幼子と共に礼拝をささげたい。

テキスト

32 犯罪人 マタイやマルコでは「強盗」と記されている。彼らは習慣のないいわゆる「強盗」の類ではなく、熱心党の者たちであったのではないかという見方もある。それと共に、この犯罪人はユダヤ人であったであろう。39節の言葉よりそのように推測できる。

33 どくろ ヘブル語やアラム語では「ゴルゴタ」と訳されている。マタイ、マルコ、ヨハネは、この「ゴルゴタ」を採用している。一方、ルカは異邦人に向けてこの福音書を書いていることから、アラム語を避けて「どくろ」と書いたのであろう。「ゴルゴタ」はラテン語では「カルバリ」である。十字架刑場の名がなぜ「どくろ」と呼ばれていたのか、その理由は諸説あるが定かではない。ただ、この場所がエルサレム城壁の外側にあったという

ことだけは確かである(ヘブル13・12)。**十字架** 具体的に十字架刑がどのように執行されたかについては、マルコ15・14以下を参照。当時の十字架刑はいくつかの方法があった。大別すると、すでに立てられている十字架に、囚人がつるし上げられて固定されるか、それとも横たえられている十字架に釘で打ち付けられ、そしてその十字架が囚人ごとまっすぐに立てられるかである。イエスの場合は、ご自分の十字架をゴルゴタまで運ばされている(26)ので、後者であろう。死刑囚は当然のことながら裸で十字架につけられる。身にまとうものは一切ない。このままの状態で太陽と風にさらされる。しかも、当時の文献では、息絶えるまでには丸一昼夜かかることもしばしばあったようである。

34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのが分かっていないのです いわゆる「十字架上の七言」のうちの一番目の言葉。ルカのみが記しているイエスの十字架上の言葉である。百人隊長は「本当にこの方は正しい人であった。」(23・47)とイエスの十字架を表現したが、このイエスの祈りにその意味を見る。この恐るべき状況の中で、イエスは迫害者のために祈っ

た(6・27、11・4参照)。もちろんこの迫害者の中には、イエスを十字架にかけて罵声^{ばせい}を浴びせる兵士(36)や、イエスをあざ笑う民衆(35)がいた。しかしイエスは、これらの人々だけを指して「彼ら」と言ったのではない。彼らの背後には人間の罪がある。その人間の罪の神に対するとりなしとして、イエスは十字架にかかられたのである。また「彼らは、自分が何をしているのか分からないのです。」という祈りは、新約聖書、特にルカにおいて一貫して流れている神学である(使徒3・17、13・27)。「彼ら」を責めるのではなく、むしろあれみと父へのとりなしに満ちた祈りである。なお、この「分かていない」(無知)という言葉は、知的に欠陥があるということではなく、罪ある状態をあらわす言葉として用いられている。彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。死刑囚の衣服を分配するという行為は、当時の貧しい時代の慣習の反映であろうと思われるが、同時に詩篇22・18の成就でもあろう。

35 神のキリストで、選ばれた者 神によりメシアとして「選ばれた者」ならば、まず自分自身を救うことができるはずである、という考え方に立つての議員たちのあ

ざけりの言葉。一方で、民衆は立って眺めていたとある。この箇所は、他の福音書の並行記事と一緒に読みながら、民衆の思いや他の登場人物の思いを読み取っていただきたい。

38 「これはユダヤ人の王」と書いた札 この札は捨て札と呼ばれ、死刑囚が刑場に送られる時、その首にかけられるか、あるいは他の人によって高く掲げられた。そして死刑囚が十字架につけられる時、それも一緒に十字架につけられた。刑が開始されてから通行人が読めるようにと書かれたものである。この札の言葉「これはユダヤ人の王」とは、総督ピラトがユダヤ教当局に対して腹いせに書かせたもので(ヨハネ19・19、22)、ユダヤ人への嘲笑^{ちやうぎやう}の意味を持っていた。しかしこの場面では、イエス自身に対しての嘲笑の意味も持っている。

参考図書 A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書

ルカ23・39〜43

タイトル

十字架の救い

暗唱聖句

あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。

目標

悔い改めと信仰をもって、十字架による救いを受け取る。

導入

(後藤 真)

今週は受難週です。受難週は、イエス様が苦しみを受けて十字架にかかられたことを心にとめて生活します。イエス様の苦しみを思つて、ぜいたくやお祝いを控えたり、断食をしたりする人もあります。十字架のことを知っているだけではなく、生活の中で受け止めるのが受難週です。教会の先生や家族と受難週の生活を考えるのもよいかもしれません。

ふたりの犯罪人

イエス様が十字架につけられたとき、いっしょに十字架につけられた人がふたりいました。このふたりは強盗でした。ただの強盗ではなくて、十字架につけられるほどのひどいことをした強盗だったのでしょう。

このふたりはイエス様を真ん中にして、右と左にそれぞれ十字架にかけられました。何も罪を犯していないイエス様が、罪を犯したふたりといっしょに十字架につけられたのです。

われわれも救ってみよ

犯罪人のひとりイエス様に悪口を言いました。

「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」

十字架につけられ苦しかったのでしょうか。助けてほしい気持ちがあつたのでしょうか。この人にとって救われるということは、自分のやったことはどこかに置いておいて、十字架の罰から逃れて助かることでした、

この人には、

「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのが分かっていないのです。」

とお祈りしたイエス様の気持ちがわかっていませんでした。罪を赦していただく道があるのに、自分の罪をどこかに置いて、助かることばかり考えていたのです。

もうひとりの犯罪人がそれをたしなめて言いました。

「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受

けているのではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

この人は、自分が十字架につけられているのは、自分がやったことの罰だと素直に認めました。そしてイエス様は何も罪を犯していない正しい方であることを信じました。

罪とは神様を嫌って自分の思い通りに生きることです。だとすると、罪がない人はだれもいません。でもわたしたちには二つの道があります。一つは罪を認めないで神様を嫌い続ける道です。そしてもう一つは罪を認めて赦していただく道です。

パラダイスに

もうひとりの犯罪人が言います。

「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

イエス様は答えます。

「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

この犯罪人は自分の罪を認めただけではなく、自分は

罪を赦していただく資格もない者だとへりくだりました。「救ってください」ではなく「思い出してください」とお願いしたところにその気持ちが表れています。イエス様はその思いを受け止めて、「わたしといっしょにパラダイスにいる」と約束してくださいったのです。

「パラダイス」ってどこにあるのだろうか、場所がわかっていたら行きたいなと思うかもしれません。でも大切なのはパラダイスの場所ではなくて、イエス様がいっしょにいてくださるということです。

救いとは、最初の犯罪人のように罪をそのままにしたまま苦しきから助かることではありません。救いとは、神様と仲直りし、神様、イエス様といっしょに永遠のいのちを生きてゆくことです。

神様も、イエス様も、みなさんといっしょに生きたいと願っています。イエス様はそのために十字架にかかり、罪を赦す道を開いてくださいました。このイエス様の気持ちにこたえましょう。罪があることを認めて、イエス様を信じ、救いをいただきましょう。

♪両手いっぱい愛（PW13、新聖歌483、ホ146他）

聖書 ルカ23・39〜43 テーマ 十字架による救い

序論

(福井文彦)

イエスと共に二人の犯罪人も、一人は右に一人は左に十字架につけられました。この二人の犯罪人の一人が死の直前に、イエスと出会います。彼はイエスが罪のない救い主であることを認めたのです。そこで、彼は世の終わり、イエスの再臨の時の恵みを願いました。ところが、世の終わりを待つまでもなく、イエスは「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われ、その時、その場で救われたのです。

一、二人の犯罪人

イエスと共に十字架につけられた二人の犯罪人は、初めは他の人と一緒になってイエスをのしっていました(マタイ27・44)。ところが、イエスは十字架に釘づけられた時、敵を愛し、赦してこう祈られたのです。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっているのです」(23・34)と。時間の経過と共に十字架上で激痛は増し加わっていきます。イエスは

そのような中で、のしる者たちに対してもののしり返さず、苦しめられても、おびやかすことをされず、最後まで人を赦し、愛し続けられたのです(1ペテロ2・23)。しかし、一人の犯罪人は、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」とイエスに悪口を言い続けました。ところが、どの時点かはわかりませんが、もう一人の犯罪人の心が変わりはじめたのです。自分には罪があることがわかり、さらに、中央の十字架にかかっているナザレのイエスというお方は、普通の人とは違うということを感じはじめたのです。

二、十字架による救い

イエスに悪口を言い続ける犯罪人に対して、もう一人の犯罪人は彼をたしなめて言いました。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか」と。罪がわからなければ神はわかりません。神がわからなければ罪はわかりません。この犯罪人は自分の罪がわかり、神に対して畏敬の念が生まれました。しかし、悪口を言い続けた犯罪人のように、十字架刑を受けるほどの犯罪でも、罪の自覚をもたないと、「神を恐れない」のです。

さらに、たしなめた犯罪人は、〈おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない〉と、信仰を告白しました。彼は、自分の罪を認め（認罪）、罪を告白し（悔い改め）、イエスに罪がないことを認め（イエスを神と認め）、イエスに対する信仰を表したのです。

救いは、罪が大きい小さいという問題ではありません。私たちが神を敬う気持ちを持った時に、自分のうちに赦されなければならぬ罪があることに気がつきはじめます。そのありのままの自分を神の前に言い表わす時、イエスは犯罪人をお救いになったように、私たちを救ってくださいなのです。

三、一緒にパラダイスにいる

この犯罪人は、もう一人の犯罪人のようにイエスが十字架から降りて助けることを願わないで、こう嘆願したのです。〈イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください〉と。彼は一般のユダヤ人、もう一人の犯罪人や弟子たちのように地上王国を思わないで、イエスの再臨の時に覚えてくださることを願いました。

するとイエスは、〈まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます〉と告げられました。そのイエスは午後三時に息絶えたと書かれています（44〜46）。しかし、この犯罪人がイエスより先に死んだのか、後で死んだのかわかりません。十字架にかけられた場合、二日も三日もかかって死ぬということもありました。

しかし、イエスはその犯罪人に〈パラダイス〉を〈今日、わたしとともに〉あるものと宣言されたのです。ですから、〈今日〉というのは、〈今日、わたしとともにパラダイスにいます〉とイエスが言われた、その時なのです。救われた者は、キリスト・イエスにあつて生かされ、共によみがえられ、共に天上の座に着かせていただくのです（エペソ2・4〜6）。これがイエス・キリストの福音です。

結論

イエスは、だれでも、再臨を待つまでもなく、神に立ち返るものを、息を引き取る一瞬だけでなく、いつでもどこでも救いうるお方です。

研究資料

(宮澤清志)

この個所は、ルカだけが描いている個所である。ルカの福音書の中心聖句のひとつは「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです」(19・10)であるといわれる。すなわち弱い者、数に足りないと考えられている者たちへの福音ということである。ルカは、十字架を語るに当たって再度この事実を語ったのであろう。受難週にあたり、もう一度このルカのメッセージに耳を傾けたい。

テキスト

39 32〜33節より、イエスの十字架は二人の犯罪人の間に立てられたことが分かる。伝説によれば、本節のイエスをのしる言葉をかけた犯罪人は、その左側にいる犯罪人だったと言われている。「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え。」とののしった言葉から、この男がユダヤ人であって、革新的な熱心党のメンバーであったであろうと推測される。この男のこの言葉を読み解くと、彼は死に際してなお己の運命に抵抗し、己の犯した罪を他になすりつけ、特に十字架のキリストにそ

の罪を着せようとしているのであろう。十字架上で死ぬのみで、両脇の犯罪人を救うことをしないのみか、イスラエルのために戦うことをしなかったメシアは、もはやメシアではないというのである。それゆえ彼は、役人や総督の側に立ってイエスを裁くのである。一方イエスは彼の熱心党員としての裁きをも背負い、黙って十字架にかけられた(イザヤ53・7)。

40 41 この部分についてはルカのみが語っている。他の福音書では、「一緒に十字架につけられた強盗たち」(マタイ27・44)、「一緒に十字架につけられていた者たち」(マルコ15・32)となっている。いずれの記述も、この問題をふさわしく扱っているのである。二人とも、初めはイエスをのしっていたのかも知れない。しかし、十字架上でのイエスの振る舞いを見て、片方の強盗が悔い改めへと至ったのかも知れない。いずれにしても、この強盗は自らをイエスの側に置いた。自分の死を目の前にして、自らが罪人であることと、自らにくだった嚴罰を受け入れたのであろう。

42 御国に入られるときには この個所にはいくつかの訳語が見られる。「御国の位にお着きになるとときには」

（新改訳第三版）、「御国においてになるときは」（新共同訳）、「王権をもつて来られるときには」（フランシスコ会訳）、「あなたの王国」（岩隈）など。これらの相違は写本（筆記者たちが写したテキストを幾度となく書き写したものの）の相違による。ある写本の直訳は「あなたの御国に行くとき」となり、また別の写本では「あなたの御国をもつて行かれる（来られる）とき」となる。しかし、いずれにせよ、ここでは訳の良しあしではなく、各教会で使用している訳に注意を払いつつ、説教者の黙想のヒントとしていただきたい。

43 今日 ルカにおいて、この言葉の一つの意味は、もちろん「昨日と明日の間の二十四時間」という意味を持つ（12・28、13・33等）。しかし、ルカにとってはそれ以上に重要な「きょう」という言葉がある。それは、時間の流れの中から抜け出した、特別な意味を持つ「今日」である。それは、イエスのメシア的救いの出来事の起る日のことである（2・11、4・21、5・26、19・5、9等）。ありふれた「ある日」を「きょう」に変貌（へんぼう）させる力は、神の約束の成就にある（ヘブル4・7）。同時にその時間は、「歴史によって期待され準備されたものを満

たしつやつやってくる」のであり、ルカからは離れるが、そのことをもつともよく表しているみ言葉は「時は満ちた」（マルコ1・15）の「時」である。

さて、このことに関連し、ギリシャ語には「カイロス」と「クロノス」という、2つの時間感覚があると言われる。「クロノス」とは、英語の「クロック」が示すように、時計で測ることのできる時間である。「カイロス」の方は、「永遠の今」という意味合いを持つ言葉であり、イエスがこの強盗に対して語られた「きょう」とは、後者「カイロス」の意味においてである。**パラダイス** ペルシャ語から来た外来語で、元来は「囲い」を意味し、果樹その他を植え込んだ「園」を意味した。七十人訳聖書（ギリシャ語訳旧約聖書）では、特に「神の園」をさす言葉として用いられており（創世記2・8以下、13・10、エゼキエル31・8）、そこから派生して、元来の、しかし今は隠されており、未来に再び啓示される楽園、すなわち終末の時代に回復されるエデンの園を意味する名称となった。

参考図書 4月3日分と同じ。

聖書

ルカ24・1～12

タイトル

よみがえられたキリスト

暗唱聖句

あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ルカ24・5

目標

キリストのよみがえりを信じ、従う。

導入

(土屋開夫)

イースターおめでとうございます！今日は、イエス様が死に打ち勝ってよみがえられた事を特別に記念する日です！

ところで皆さんは、何か大切なものを失くして、一生懸命に探したことがありますか？例えば、おうちの鍵、自転車の鍵、大事な宝物、可愛がつているペットとか。

「アレ、無い！一体、どこで失くしたんだろう？」と、一生懸命に思い出そうとします。「どこにあるのかな？確か、この辺に置いたかな？ここにもない…ここにもない…」と。

今日の聖書に出て来る女性たちも、最も大切なものを失くしてしまったので、必死に捜していました。何を失くしたかという、なんとそれはイエス様でした！

イエス様を失った

先週は、イエス様が十字架に架かれ、死んでくださった場面でした。マグダラのマリアさん達も、イエス様が死なれた事と、お墓に葬られる様子を確かに見届けました。イエス様は確かに死なれたのです！お体はそこにはまだあったとしても、イエス様の霊はもうそこにはおられず、陰府に落ちてくださったのです。女性たちも弟子たちも、イエス様を失ってしまったのです！

なんとという悲しみだったことでしょう！今までずっと一緒にいてくださった、優しい愛に満ちたイエス様、希望の光であるイエス様を失ってしまった（と思った）。そのショックはどれほど大きかったことでしょう。

イエス様を捜して

さて、イエス様が死なれたのは金曜日。次の土曜日は安息日ですから、あまり出歩くことは出来ません。そして日曜日の朝早く、なんと女性たちはイエス様を捜しに出かけました！イエス様に会いたくてたまらなかったのでしょうか。でも、どこを捜せばいいのかわかりません。とりあえず女性たちはお墓に行きました。イエス様は死

なれたのだから、お墓の中に、死人の中におられると思うたのでしよう。

ところがお墓に行ってみると、石の蓋があいていて、中にイエス様のお体はありません！すると、まぶしく輝く二人の御使いが現れ、こう言いました。

「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしよう。」(5～7)

女性たちは驚き恐れながらも、イエス様の言葉を思い出しました！(参照 ルカ9・22) 「そうだわ、思い出した！ イエス様は確かに『三日目によみがえる』とおっしゃっていたわ！」

イエス様の言葉を思い出した時、そして信じた時、女性たちは失っていたイエス様を心の中で再び見つめました！そしてこの後、イエス様は女性たちにお姿を現されたのです(参照 マタイ28・9)。

イエス様は信じる人と共に

私たちもこの女性たちや弟子たちのように、イエス様を見失うことがよくあります。「イエス様は本当に共におられるのだろうか？ 本当に私を愛してくださってるのだろうか？ 私の悲しみを分かってくださってるのだろうか？ 本当に救ってくださるのだろうか？ お祈りに答えてくださるのだろうか？」それは、実はイエス様が「信じる心」が失われそうになっているのです。

そんな時はどうすればいいのでしょうか？ そう、女性たちのように、イエス様の約束の言葉を思い出せばいいのです！ 聖書を聞いてください、暗唱聖句を思い出してください！ 私たちの罪の罰を身代わりに受け、死んで陰府にくだり、命によみがえられたイエス様は、約束通り、信じるあなたと共にいてくださるのです！

♪主は今生きておられる♪(PW49)

聖書 ルカ24・1～12 テーマ よみがえられたキリスト

序論

(小泉 創)

イエスに従ってきた女性たちは、愛するイエスの死をなすすべもなく見守りました。それはどれほどの悲しみ、痛みだったことでしょう。彼女たちは三日後、まだ夜も明けないうちに墓へと向かいました。葬られたイエスのために、自分たちにできる精一杯のことをさせていたかどうかと願ったからです。しかしそこでは、思いもかけない出来事が彼女たちを待っていたのです。

一、途方に暮れる

女たちが見たのは、主イエスの墓をふさいでいた石が転がされ、葬られたはずの主のからだが見当たらない空の墓でした。さらに悲しみの増す出来事を前に、女たちは途方に暮れました。私たちも思いがけない現実打ちのめされることがあります。その時には私たちの経験や、準備してきたことが何も役に立たないのです。

女たちが空の墓の意味を理解できなかったのは、無理

もないことです。死は断絶です。生きている者と死んだ者との間には深い淵があります。誰がその深い淵を乗り越えられると考えるでしょうか。

しかし、万策尽きた絶望の中からでも、神はみわざを始めることのできるお方です。今、私たちの目の前にある、空の墓のような現実にも、神は力をあらわすことができるのです。

二、驚き恐れる

女たちの目の前に突然、まばゆいばかりの衣を着た二人の人があらわれました。女たちは恐ろしくなって顔を伏せました。彼らは御使いでした。

（あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです）。十字架で死なれた主イエスのことを、御使いは生きている方と呼び、よみがえられたのだ、と宣言しました。主イエスは生と死の深い淵を乗り越えて帰ってこられたのです。死は終わりではなくまりました。誰も打ち勝つことができなかった死に、主は勝利なさったのです。これは、死の中に閉じ込められるすべての人に解

放を告げる勝利の宣言です。

クリスマスに神の子が人として来られたことも驚きです。しかし十字架で死なれ、墓に葬られた方がよみがえられたというイースターの出来事はさらに大きな驚きです。このことを事実と信じたときに、この世界はまるで違う光景に様変わりします。

三、証人となる

御使いたちは、イエスの語っていた言葉を思い出しなさいと告げました。そのことを聞くまで、女たちもイエスが約束しておられたことを忘れていました。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」(ヨハネ14・26)。

女たちはイエスがよみがえりを約束しておられたことを思い出し、信じました。私たちを力づけるのは、聖書の中に記されている神のみ言葉です。そのみ言葉に聖霊が働かれて、私たちは変わることはない神の声を聞き、生きておられる神にふれていただけるのです。

女たちは急いで弟子たちのところに帰り、自分たちが知ったことを報告しましたが、女たちの語ることは、使徒たちにも愚かなことにしか聞こえませんでした。私たちが喜びをもって伝える言葉もすぐには受け入れられないかもしれません。しかし、弟子たちにも主の黄泉がえりを信じる時が用意されていました。証人とされた者は、相手の反応に一喜一憂せず真実なあかしを続けていきます。こんなに素晴らしい希望はありません。

結論

イエスはよみがえられた！それは女たちが今まで見聞きしてきたどのような奇跡よりも、大きな驚きと喜びとなりました。よみがえりの命は、悲しみ、途方に暮れ、恐れている者たちを、喜び、希望であふれさせます。私たちも、主イエスが与えてくださったよみがえりの命に生かされ、変わることはない喜び、希望のあかしをしていきましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈

ルカによる福音書には、主の十字架と復活について繰り返して教えられるながらその本質を理解できない弟子たちの姿が描かれてきた。復活の日の記事においてもそれは変わらない。しかし主イエスは「愚か」で「心が鈍い」(25)弟子たちを見捨てず、繰り返し彼らに御自身を現し、旧約聖書からメシアの苦難と復活について教えられた。ペンテコステの日に聖霊が降ることによって、弟子たちは主の教えを真に理解し、確信を持つて福音を宣べ伝え始めたのである。

テクスト

1 週の初めの日の明け方早く 主イエスが十字架で息を引き取った金曜日の日没から土曜日の日没までは安息日で、死体に触れることはできなかった。土曜日の日没後に女性が外を出歩くことは危険だった。それゆえ、彼女たちは可能な限り早く主の墓に向かったのである。**準備しておいた香料** 金曜日には時間の制約で略式の埋葬しかできなかったため、改めて正式な葬りを行おうとし

たのである。

2 石が墓からわきに転がされていた マタイの並行箇所には御使いが石を動かして地震が起こったとの記述があるが、マルコとルカは石が動いていた事実のみを記している。女性たち自身の目撃証言であろう。

3 主イエスのからだは見当らなかった 女性たちは主イエスの遺体が当然墓の中にあるものと思っていた。主を心から愛していた彼女たちにとっても復活は思いもよらない出来事だったことがわかる。

4 途方に暮れていると 前置詞(ギ)エンと不定法が用いられ、事柄の同時性が示されている。「途方に暮れていたまさにその時に」とでも訳せばよい。**まばゆいばかりの衣を着た人が二人** マタイでは「主の使い」、マルコでは「青年」で共に単数形。ルカは主イエスの昇天の記事(使徒1・10)でも、現れた御使いが「ふたり」であったことを記している。明らかにルカは重要な出来事の証人として「二人」が現れたことを重視している。ヨハネ20・12にも「二人の御使い」が登場することから、この時の御使いが二人いた事には強固な伝承があったとみなしてよい(マーシャル)。近くに来た(ギ)エフィステミ、直

訳は「すぐそばに立っていた」。それまでいなかったものが突然そばに立っていることで、超自然的な出現が示されている。使徒12・7も同様。

5 恐ろしくなって、地面に顔を伏せた この記述からも御使いの出現が超自然的な出来事であったことがわかる。どうして生きている方を死人の中に捜すのですか この問いかけは他の福音書には見られないが、ルカの文脈には適合している。熱心に主に従いながら、復活を理解できず見当違いのところを探している弟子たちの姿が示されている。

6 ここにはおられません。よみがえられたのです マタイとマルコにも共通する復活の宣言である。知的理解によって復活を受け入れることはできない。神の宣言（み言葉）をそのまま受け取る信仰が求められている。まだガリラヤにおられたころ…思い出しなさい 十字架と復活の予告は、主イエスによって度々語られていた。弟子たちに必要なのはそのみ言葉を思い出し、信じることだった。「ガリラヤ」はマタイとマルコでは復活の主と会うために帰っていく場所だが、ルカではそこで語られたみ言葉に帰るべきことが強調されている。

8-9 彼女たちはイエスのことを思い出した。そして墓から戻って…報告した 語られたみ言葉に立って復活を最初に信じたのは、この女性たちだった。

10 女性たちの名前は福音書によって多少の異同があるが、マグダラのマリアについては全て一致している。復活証言においては彼女が中心的役割を担っていた。「ヤコブの母マリア」は主イエスの母であろう。

11 この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった 女性たちの証言にもかかわらず、復活を信じようとしなかった男性の弟子たちの姿が描かれる。ルカが繰り返し記録する「愚かで心が鈍い」弟子たちの姿である。

12 古代の写本や教父の引用にはこの節を欠いたテキストが存在するため、ヨハネの記事に由来する後日の挿入とみなす学者もいる。しかしこの記事はヨハネよりも古い伝承に由来することと24節との整合性から、ルカ本来の記事であったとみなしてよい（マーシャル）。

参考図書 ボウカム『イエス入門』、クラドック（現代聖書注解）、モリス（ティンデル）、Green (NICNT)、Marshall (NIGTC)。

聖書

ルカ24・13〜32

タイトル

復活のイエス様に出会う

暗唱聖句

すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなつた。

ルカ24・31

目標

霊の目を開いていただき、復活のキリストと出会う。

導入

(飯田勝彦)

先週は、イースターでした。イエス様は、週の初めの日、今で言えば日曜日に復活されました。教会は約二〇〇年間、日曜日に教会に集まり復活されたイエス様を覚えて礼拝しています。ですから、毎週、イエス様の復活の恵みを頂くことができます。この素晴らしい恵みを毎週確認できることは恵みです。

死より復活されたイエス様

これまで数週間に渡り、イエス様の十字架のお話しを聞いてきました。イエス様は、どうして十字架にかかって死ななければならなかったのでしょうか。何か、悪いことをしたからですか？ 一番弟子のペテロはどうして十

字架にかかられるイエス様を守ることができなかったのでしょうか？

イエス様は、十字架にかかるような罪は何も犯されませんでした。でも、私たち人間の醜い罪を赦し罪から救い出すために、イエス様は十字架にかかれ死なれました。そして、墓に葬られたのです。その墓の入り口は、大きく重い石でふさがれました。

死とは、悲しく恐ろしいものです。でも、イエス様は死んで終わりではありませんでした。以前に約束されていた通りイエス様は死から復活されました。イエス様は、復活を通して、私たちの最大の敵である死を撃ち破り、勝利してくださいました。この復活の恵みを深く心にとめて歩みましょう。

イエス様が分らない弟子たち

イエス様が復活されたその日、二人の弟子たちがエマオの村に向かつて歩いていました。二人の話題の中心は、イエス様のことでした。

「なあ、イエス様が十字架で殺されたなんて、信じられないよ」。

「悲しいけど、本当なんだ。でも、そのイエス様が復活

されたらしいよ。婦人たちが墓に行ったら、イエス様がおられなくて、天使たちが『イエス様は生きておられる』と告げたらしい」。

するとそこに、なんと復活されたイエス様が来られ、弟子たちが話し合っている内容を尋ねられました。弟子たちは立ち止まって、エルサレムで起こったことを話し始めました。しかし、彼らはそれがイエス様だと気付きません。それは、彼らの目がさえぎられていたからでした。

もし、私たちが復活のイエス様を信じることができないとするなら、弟子たちと同じように目がさえぎられています。それは身体の手目ではなく、霊の手目です。

イエス様が分かった弟子たち

復活されたイエス様は、弟子たちに聖書に約束されているご自分のことについて話されました。弟子たちは、イエス様のお話しが非常に興味深かったのでしょうか。もっと聞きたいと思って「一緒に泊まってください」と願います。イエス様は、それを快く受けられました。

食事の時間になったとき席に座り、イエス様はパンを取り、賛美の祈りを唱えて、パンを裂き弟子たちに渡さ

れました。その時です！ 弟子たちの霊の目が開かれました。目の前におられる方が、十字架に架かり復活されたイエス様だと分かったのです。その瞬間、イエス様の姿は見えなくなりました。

弟子たちは「あの方と話しをしている時に、心が燃えていたのは、あの方が復活のイエス様だったからだ」と語り合いました。復活のイエス様に出会った彼らは、このことを他の弟子たちにも伝えました。イエス様に出会った弟子たちは、どんなに嬉しかったでしょうか。

まとめ

復活のイエス様との出会いは、私たちの歩みに大きな喜びを与えてくれます。でも、霊の目が開かれなないとイエス様が分かりません。「私も復活のイエス様に出会いたい」と願う人は「私の霊の目を開いて、イエス様が分かるようにしてください」と是非、祈ってください。また、教会学校の先生に祈ってもらってください。

皆さんが復活のイエス様に必ず出会うことができ、大きな喜びが与えられますように。

♪よろこびはわがこころに♪ (ホ132)

聖書 ルカ24・13-32 テーマ エマオへの道

序論

(水川武志)

今日のところは、一般に「エマオの途上」とか、「エマオへの道」と題されています。主題は「心の目を開かれて」です。主イエスの復活という事は主イエスの処女降誕以上に、受け入れ難い出来事です。実は、エマオの途上の二人の弟子たちも、主イエスの復活ということに對して心を開いていたとは思えません。甦^{よみがえ}りのイエスとの親しい交わりや、食事を共にする中で、復活の祝福の中に引き入れられた物語です。復活のイエスのほうから、心の目を開いてくださった恵みの証しです。

一、目がさえぎられていた弟子たち

この日(主の甦りの日)、恵みの座から悲しそうな顔をして、遠ざかっていく人たちがいました。彼らは、主が甦られたとのメッセージを聞いていたのです(23)。でも、甦りのメッセージは、彼らに喜びをもたらしませんでした。迫害下に教会を誕生させ、歴史を変えていく、

あの爆発的な力が沸き上がってこないのです。実に不思議なことです。

先年、私も空^{から}の墓(聖墳墓^{せいふんぼきようかい}教会)を訪ねてきました。墓が空である事実、主の復活を記念する数々のレリーフ等を見ましたが、それで、自分を変える程の力を体験できませんでした。復活の信仰とは、人間が様々な知恵を尽くし、墓の空っぽであることや、他の人の体験談を聞いた^{たり}したこと^で確かめられることではないのかも知れません。今、生きておられる主イエスにお会いすることによって、初めて道が開かれることでしよう。

福音が伝える主イエスの甦りについては、甦られた主イエスのほうからいつも近づいて、ご自身の復活の事実を証ししておられます。目がさえぎられている不信仰を取り除いていただくべきなのです。

二、目を開いてくださる主イエス

悲しみつつ恵みの座から遠ざかる弟子たちを、主イエスは無視されません。「イエスご自身が近づいて来て、彼らとともに歩き始められた」のです。彼らの心は、十字架につけられたイエスのこと、墓に行った数人の女性

たちが伝えた空の墓のこと、ヘイエス様が生きておられるとの御使いのメッセージに占領されていたのです。けれども主イエスの甦りの命には、満たされていませんでした。

私たちの間にも、同じようなことはないでしょうか。十字架と復活に関する研究が盛んになされながら、命の躍動につながってこないのです。しかし、そんな時にも、私たちに語りかけるお方がおられるのです。

かつて、殺人の上に放火して証拠の隠滅を謀った人を拘留所に訪ねたことがあります。彼は無罪を裁判で主張していたのです。訪問帰りに、新約聖書を差し入れ、読んで祈ることを約束させました。一週間後、再訪問した時、彼の態度は一変していたのです。無罪の訴えではなく、「イエス・キリストが十字架にかけられたことと、復活されたことが聖書に書かれていました。私は神様に罪を告白しました。そして殺めた人（あや）が天国に入れられますように、毎日祈っています」と言うのです。彼は、控訴を取り下げ、素直に刑に服し、新しい歩みを始めました。神が彼の心を目覚めさせ、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰に導かれたのです。

主ご自身が、聖書全体を説き明かし、福音の真理に目覚めさせてくださったのです。エマオの弟子たちは、この恵みを経験したのです。私たちも心を開いて、主のお働きに耳を傾けるのです。

三、目が開けて、イエスがわかった

み言葉が説き明かされた時、心が内に燃え始めました。それは後になって気づくほどの、静かな経験でした。しかし、この穏やかな火は人生を変え、世界を変えるほどに確かなものでした。み言葉がわかり始めたのです。み言葉が示す主の恵みによって彼らの心が開かれ、イエスであることがわかったのです。主イエスのお姿が見えなくなっても揺るがない確信が、彼らの心を占領したのであります。

結論

研究の成果としての知識ではなく、私たちに語りかけてくださっているお方のみ言葉を聞き得る心の目を開かせていただきます。生徒に教えることに勝って、復活の主を証しする者として、用いていただきます。

研究資料

(中島啓二)

ルカ福音書も、イエスの復活の場面を直接には描いていない。御使いたちが女性たちに主の復活を宣言し、それを聞いた彼女たちが他の弟子たちに知らせた。ここに登場する二人の弟子も、彼女たちからそのことを聞いていた。にもかかわらず、その心はなお暗かったのである。

テキスト

13 弟子たちのうちの二人 一人の名はクレオパとある(18)。ヨハネは十字架のそばにクロパ(「クレオパ」)の妻マリアがいたと記す(19・25)。それがもう一人の弟子かもしれない。エマオという村 正確な位置は不明。ヤッファへの途上にアムワスという地名があるが距離が32kmもある。エルサレムの西のアツマウースは距離が6kmと、半分しかない。もしかしたらルカは往復の距離を記したのかもしれない。

15 イエスご自身が近づいて来て 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。信仰も神からの賜物なのである(エペソ2・8)。

16 二人の目はさえぎられていて… イエスの容貌が以ようぼう

前と変わっていたのではない。マグダラのマリアの場合と同様(ヨハネ20・14)、霊的な理由で、彼らはイエスに気づかなかったのである。

21 この方こそイスラエルを解放する方だ この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは、当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主であり、その望みはイエスの死によって、消え去っていた。そのことがあってから三日目になります。彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのであろう。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。

22 仲間の女たちの何人かが… 10節に記されている女性たち。彼女たちは御使いを通してイエスの復活の予告を思い出し、墓が空であることの意味を悟った。そして喜びをもってそのことを使徒たちに伝えたのであるが、彼らはそれを信じなかつたのである。

24 あの方は見当たりませんでした 墓が空である事実を弟子たちは確認していた。だがその事実も、死者の中

にイエスを捜す者には、失望しかもたらさなかった。

25 預言者たちの言ったことすべて 間違ったメシア理解が、間違ったイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となった。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシア理解を弟子たちに語ったのである。

26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入る。これが預言者の指し示すキリスト像であった。苦難は栄光のために必要な筋道であったのである。しかし当時のユダヤ社会にメシアと受難を結びつける思想があったかどうかは疑問。むしろ一般的には、受難は国家・民族と結びつけられ、メシアはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者たちから始めて 旧約聖書は律法、預言書、諸書の三つに分類される。聖書全体の「聖書（ギリシア語）」は「諸書」の意もあるが、ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 もっと先まで行きそうな様子であった このようにして、相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀にかなったことであった。

29 そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いていま

す その日のメインの食事をする時間。5千人の給食も「日が傾き始めた」（9・12）頃であった。強く勧めた旅人へのもてなしは宗教的にも高位の美德であった。

30 パンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された 普通はその家の主人がする作業。それをイエスが行ったのである。これは弟子たちに、前述の5千人の給食、さらに最後の晩餐（22章）を思い出させたであろう。

31 彼らの目が開かれ その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、彼らはずいぶんイエスを認めるに至ったのである。するとすぐにイエスは見えなくなったが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかった。

32 私たちの心は内で燃えていたではないか 単なる心の高揚ではなくそれ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなった」と訳す（これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を彷彿させる）。後代の信者たちも、この弟子たちのように、復活の主の臨在を認めるところから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

参考図書 注解書 *Elis* (NCB), *Marshall* (NIGTC), *Nolland* (Word), 榊原康夫 (新聖書注解)。その他 *The IVP Bible Background Commentary: NT*

聖書

ヨハネ20・24～29

タイトル

見ないで信じる信仰

暗唱聖句

あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。

目 標

キリストの導きの中で、目に見えないキリストを信じる者となる。

ヨハネ20・29

導入

(今田雅子)

学校に行くK君に、「お母さんね、今日の昼から用事があつて出かけるの、K君が帰って来たときいないけど、K君の大好きなお菓子を用意しておくからね。」K君は、「お母さんがいないのは、ちょっと寂しいけど僕の大好きなお菓子があるのは凄く嬉しい」と、喜んで学校に行きました。

皆さんはK君のように、お母さんの言ったことを信じて喜ぶでしょうか。それとも、お母さんの言ったことを信じられないで疑って喜べないでしょうか。

イエス様と会わなかったトマス

さて、4月17日は、イエス様がよみがえられたイース

ターでしたね。弟子たちは、イエス様が復活されたことをすぐに信じたのでしょうか。

十字架にかかって三日目によみがえられたイエス様は、弟子たちによみがえりの姿を現されました。それはちょうどイエス様の死んだ後、ユダヤ人を恐れた弟子たちが、一つの部屋に集まって「今度は、俺たちが捕まっ、殺されるかもしれないぞ!」「えー、そっ、そんな恐ろしいこと。怖すぎる」とガタガタ震えている時でした。戸にはしっかりと鍵がかけられていました。イエス様がスツと部屋に入って来られ、「平安があなたがたにあるように。」と言われました。そして、十字架の釘跡のある手と脇腹を見せられました。復活されたイエス様を見た弟子たちは、大喜びしました。飛び上がるほどの喜びだったでしょう。ところがその時、12弟子の一人のトマスは、たまたまそこに居なかったのです。しばらくしてトマスが帰って来ました。イエス様を見て、大喜びしていた他の弟子たちは、「イエス様が、ここに来て、話をされたんだ。俺たちはイエス様にお会いしたんだ、見たんだよ!」とトマスに言ったのです。するとトマスは「そんな馬鹿なことあるもんか、嘘だろ! 死んだ人が生き

かえるなんて！ お前たち気が変になったのか？」と全く信じる事ができません。「俺は、その手に釘の跡を見て、指を釘の跡に入れて、俺の手をその脇腹に入れてみないと、絶対に信じない！」と力を込めて言ったのです。

トマスに会われたイエス様

それから一週間がたちました。その日も弟子たちは戸を閉め、鍵をかけて、部屋の中にいました。今度はトマスもいます。イエス様が、スツと部屋の中に入って来られ「平安があなたがたにあるように。」と言われました。それから、トマスに向かって「トマス、あなたの指をここに当てて、わたしの手を見てごらん。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れて見てごらん。」と言われたのです。トマスは触らなくてもイエス様だと分かりました。すぐ床にひれ伏し、「私の主、私の神よ。」と答えたのです。するとイエス様は、「トマス、あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」と言われました。

見ないで信じる人

イエス様は、トマスを責めているわけではありません。見ないで信じることの大切さを教えてくださったのです。

す。イエス様のよみがえりは、「えっ！嘘でしょ」と誰もが信じる事ができないようなことですよ。けれど、これは本当のことなのです。

今、私たちは目でイエス様を見ることはできません。では、どうしたら今も生きておられるイエス様を信じる事ができるのでしょうか。それはみ言葉による以外のありません。聖書には、復活の主に出会った人たちの体験や復活の主に出会って人生が変わった人たちのことが書かれています。それらによって、イエス様を信じる事ができるのです。イエス様は、トマスとのやり取りによって、今の私たちのために、「見ないで信じる人たちは幸いです。」と言ってくださいなのです。

皆さんも、教会学校の先生や教会の人たちに「どうしてイエス様を信じる事ができたの」と聞いてみてください。きっと、いろんな話をしてくれるでしょう。

さあ、イエス様を信じて、神様の愛と恵みに満ちた、喜びいっぱい毎日を歩んでみませんか？

きっと「イエス様を信じて良かった」という毎日になりますよ。

♪さあ！ イエスさまを信じましょう♪（ふー）

聖書 ヨハネ20・24・29 テーマ 見ないで信じる信仰

序論

(水川武志)

共に集う場（礼拝）に一緒にいなかったトマスは、生きておられる主の顕現に浴する機会を逃してしまいました。礼拝を欠席した結果に伴う失態です。（私たちは主を見た）と証しする同僚の言葉がわからない。霊的顕現ではなく、体の伴った復活体ということが理解できない。このトマスの叫びを、主イエスは聞いてくださったのです。トマスも集う場に、復活の主が再び顕現くださったのです。そして、み言葉を聞いて信じる信仰の神髄に、世のキリスト者を導いてくださったのです。

一、彼らと一緒にいなかったトマス

トマスがなぜ他の弟子たちと一緒にいなかったのか不明です。殉教の覚悟のできていた（11・16）トマスは、他の弟子たちがユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた時、一人町に出て、食料の確保か、町の様子を見るため外出していたのだと考える人もあります。ライルは「十分な理由もないのに神の民の集まりから離れることは、

いつも賢明でない」と手厳しい見方のあることを紹介しています。確かに共に集う礼拝の場で、生きている主の臨在に触れる事は事実（マタイ18・20）です。トマスの痛みを繰り返さないようにしたいものです。

二、戸惑うトマス

（私たちは主を見た）と証しする弟子たちの言葉を信じられないトマスは、イエスを信じられなくなったのです。人が確認できる領域を超えた内容だからです。彼のこの戸惑いは、現代の私たちの課題でもあります。墓が空で、遺体が見当たらない状況証拠や、（私たちは主を見た）という証言があったとしても、体の伴う復活となると理解できないトマスの正直さに、軍配をあげたくなるのではないでしょうか。「私は、その体に十字架の痕跡を確認しなければ、決して信じません」とのトマスの正直な訴えに、同感できることがあります。トマスは、主の復活を肯定したために、確かな証拠を手にしたかったのではないのでしょうか。

三、トマスの求めに応えられる主

トマスは、彼をだましたり陥れたりする動機を全く持

たない親友10人の証言を信ずることを拒否しました。これはとても悲しいことです。これは、私たちがどんなに意をつくしてイエスが神であることを証言しても、信仰に導けないむなしさを体験した時のことを思い出させます。このような時、「弟子は、トマスに証しをし、彼の不信仰を取り除きとう御座います。主はこの弟子と共に働いてトマスにご自身を現し給います」とバックストンは解説しています。

いつも自分の手と目で確認できない物を信じられない、トマスのような人は多いのです。重体の中風患者をイエスの所に連れて来た人たちの熱心さをご覧になられた主は、中風患者の罪を赦し、病を癒されました。10人の弟子たちは、かたくなに信じることを拒むトマスを、非難したり排斥したりしていません。1週間後の日曜日、彼らはトマスと共に家の内で集います。前週の礼拝の再現です。戸を閉ざした家の中に主イエスが入って来られ、中に立ち、「平安があなたがたにあるように」とみ声をかけてくださいました。

私は受洗して一年目、新生の恵みを頂いたにもかかわらず、罪に勝てない自分に悩まされました。聖餐礼拝で、

今日は聖餐を断ろうと決心して臨んだのです。「これは私たちのために裂かれた主イエス・キリストの御体です」との言葉を耳にした時、十字架の主の臨在に包まれたのです。「こんな罪人の私のために、身代わりとなって十字架におかりくださった主イエス様、感謝します」と、パンとぶどう汁を押しいただきました。逆転の祝福でした。〈あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい……。トマスはイエスに答えて言いました、〈私の主、私の神よ〉。トマスはイエスの復活体に接して、ただ彼が甦り給うたという事実を信じただけではなく、もっと深く、イエスの神性に対する信仰を告白したのです。そしてこれは、この福音書の冒頭にある「ことばは神であった」という宣言に相応するものです（高橋三郎）。

結論

トマスの信仰告白は、これ以降の信仰者、すなわち、すべてイエスの姿を見ず、イエスの弟子の言葉による宣教によって、信じて救われる者たちの初めとなったのです（Iペテロ1・8〜9）。「御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています」（Iペテロ1・12）。この祝福に与っている事を感謝しましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

24 デドモと呼ばれるトマス デドモはギリシャ語名、トマスはアラム語名で、いずれも「ふたご」の意。共観福音書では名前だけの登場だが、本書では他に2回その言動が記録されている(11・16、14・5)。そこから垣間見えるのは、忠誠心に富むが、悲観的な人物像である。イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった トマスだけ不在であった理由は不明。悲嘆に暮れる時、仲間と慰め合うのを好む人もいれば、一人で過ごしたい人もいる。悲観的なトマスは後者であったのかもしれない。その時に仲間と一緒にでなかったことは決して責められることではないだろう。

25 その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ トマスがこのように言うのは、弟子仲間が彼を説得するべくイエスの肉体の様子について詳細に語ったからだろう。トマスは、彼らが何かを見たことを疑っているのではない。問題は何を見たかである。彼は、弟子仲間が幻影や幽霊といった実体(肉

体)のないものを見たと考えたのである。決して信じません 「疑い深いトマス」というレッテルを貼られるゆえんだが、程度の差はあれ、弟子仲間が女性たちの報告に対してとった態度と根本的には変わらない。トマスとて、その場にいれば信じていたはずなのである。

26 八日後 ユダヤでは起点の日も含めて数えるので、7日後、すなわち次の日曜日である。

27 あなたの指をここに当てて…信じない者ではなく、信じる者になりなさい 復活のイエスは、霊だけではなく、手で触れる肉体を持つ存在である(ちなみに教会が直面した初期の異端思想はキリストの肉体を否定する仮現説であつた)。イエスはトマスが弟子仲間言い放つたことをご存知であつたので、見るだけでなく、手で触って確かめよと招かれたのである。もちろんこれは単なる勧めではなく、信仰へのチャレンジである。

28 私の主、私の神よ 復活の主を見、またその声を聞いたとき、その体に触れるまでもなく、トマスの心の奥底からこの言葉があふれ出た。これは単なる呼びかけではなく信仰告白である。しかも抽象的な神学的定義ではなく、「私の」という人格的な告白である。イエスこそ神

であり、自分は僕としてその真の神に喜んでお仕えする、との決意表明なのである。意外にも、神という表現がイエスに用いられる場面は極めて少ない（1・1、テトス2・13、ヘブル1・8、1ヨハネ5・20）。そのうちの一つ、「ことばは神であった」という本福音書の最初の宣言がこのトマスの信仰告白によって確証づけられるのである。その意味で、この信仰告白は、本福音書の頂点と呼べる。一度は復活を疑った者が、よみがえった主に對する最高の信仰告白を言い表したのである。

29 あなたはわたしを見たから信じたのですか イエスは必ずしもトマスを非難しているわけではない。他の弟子たちもみな、見るまでは信じなかったものであり、彼らがトマスよりも1週間早く信じたのは、1週間早くイエスを見たからである。しかし重要な点はそこではない。見て信じるのが、見ないで信じることよりも劣るわけではないし、反対に、見るができないのは不幸だといふでもない。重要なことは、トマスや他の使徒たちのように復活の主を見る特権にあずかる人たちもいるが、教会の歩みの中では、大多数がそうでない人たちだといふことである。そして、その後者も決して不幸ではなく、

幸いなのだということである。見ないで信じる人たちは幸いです。よって「『うな者は幸いです』で有名な八福の教え（マタイ5章）と同じ形式で、イエスはこのように語るのである。使徒たちの時代が過ぎ去れば、すべての信者は、見ないで信じなくてはならない。それがなぜ幸いなのかというと、聞いて信じることができるからである。『信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリスト

についてのことばを通して実現するのです』（ローマ10・17）。ヨハネはこのことを知っていたからこそ、「キリストについてのことば」、すなわちキリストの物語を、福音書に著したのである。その目的は読む者が信仰に至るために他ならない（31）。トマスは最初の日曜日に不在であったことで、実質的に、よみがえりのイエスを見ることのできない後世のクリスチャンたちと同じ位置にあった。この福音書を読んだ最初の読者たちは、イエスを見なかったが、信じた。同様に、現代の読者たちもまた、イエスを見ないが、信じることはできるはずなのである。

参考文献 注解書 Beasley-Murray (Word), Lindars (NCB) 他。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

Ⅰサムエル1：1-20

タイトル

ハンナの祈り

暗唱聖句

安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。

Ⅰサムエル1：17

目 標

苦しみの中にあつても、神が働かれることを信じ、祈り続ける。

行き場のない思いの中で

(櫻井めぐみ)

ハンナには悩みがありました。子どもが与えられないという悩みです。願っているのに子どもが与えられないというのは、大きな痛みでありプレッシャーです。さらにその苦しみに輪をかけたのが、一夫多妻という制度でした。これは本来の神様のみこころではありませんし、もちろん今の日本でも禁じられています。古代のイスラエルではこの制度が認められていたのですが、ここから家庭内の問題が起きるのは当然のことです。ハンナの夫であるエルカナには、ペニンナというもう一人の奥さんがいましたが、ペニンナには何人も子どもがいました。ライバルであるハンナとペニンナが互いに火花を散らす

ような場面がありました。それは家族で主を礼拝し、いけにえをささげる時のことです。動物のいけにえを焼いてささげるのですが、それ以外の肉の部分は、家族で分け合って食べることになっています。その分け前が配られる時、家族の数に応じた分が配られます。家族が多いペニンナは多くの肉をもらうことができますが、ハンナには一人分の肉しか渡されません。こういう時にペニンナは、ハンナに対してマウントを取るわけです。それはハンナにとって非常に屈辱的なことでした。いくら夫に「あなたにとつて、私は十人の息子以上の者ではないのか」などと言われても、そんな言葉は何にもなりません。自分が願っているのは、とにかく子どもが与えられることなのです。しかし、ハンナのやり場のないその思いの中でささげられた祈りが、旧約聖書の中で最もすばらしい、厳粛な祈りの一つとして注目されることになるのです。痛みとは、たとえて言うなら祈りのスイッチみたいなものです。誰かに理解してもらいたいけれど、でも誰にもわかってもらえないような、行き場のない苦しい思いは、私たちを本気で神様に祈らせるためのスイッチなのです。私たちは、もうどうしようもないところに追い

込まれてはじめて、本気で神様に祈ります。もちろん、みんなは毎日祈っていると思いますが、その習慣的な祈りをも、神様は聞いてくださいます。でも、私たちは時に、このハンナのように、本気で祈らなければならぬ時がくるのです。ハンナは「募る憂いと苛立ち」に押し出されて、主に向かって泣きながら、心を注ぎ出して祈りました。それは、美しい祈りでもかっこいい祈りでもありません。ただ彼女は自分の正直な気持ちをそのまま祈ったのです。

祈りの不思議と素晴らしさ

しかし、そんな祈りの中で、ハンナは神様の不思議な平安が与えられました。ハンナは、神様に心を注ぎ出して祈り、自分の願いを本気で願いました。そうして祈るうちに、とても厳肅な祈りに導かれてゆきました。自分に子どもが与えられたなら「私はその子を一生の間、主にお渡しします。」と祈ったのです。自分が心の底から願っている子どもですが、願いを聞いていただけたならその子を神にささげると言うのです。祈りがただ自分の願いだけで終わるのではなく、ハンナもまた自分自身を神にささげる、献身の思いを表す祈りとなりました。そ

して祈りの結果、ハンナの顔はもはや以前のようではなくなつたのです。

安心して行きなさい

この時の祭司であつたエリは、祈っていたハンナから詳しい事情を聞きました。そうして彼女に言います。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願つたその願いをかなえてくださるように。」ハンナはその言葉の通り、もう思いわずらつてはいませんでした。すぐに願いが聞かれたわけではなく、問題が解決したということでもありません。しかし彼女はその祈りによって明らかに変わりました。神様からの平安が与えられたのです。そうしてやがて時が来てハンナの願いは実現し、待望の男の子が生まれるのですが、その子はただの子どもではありませんでした。その子はイスラエルを代表する、偉大な預言者の一人となるのです。今日はハンナの祈りを通して、祈りの素晴らしさを知ることができました。みんなも、苦しい中でこそ、自分の心を注ぎ出して神様に祈ってください。そのような祈りへと導かれてゆきますように。

♪祈ってごらんよわかるから♪(新聖歌481、PW7他)

聖書 Iサムエル1・1〜20 テーマ ハンナの祈り

序論

(福井文彦)

サムエルは、士師として最後の人物であり、また預言者としては最初の人物です。彼はモーセとダビデの間のイスラエルの歴史において最も偉大な人物と考えられています。そのサムエルの誕生に際しては、悪い時代に染まることのなかった母ハンナの神への絶対信頼と祈りがあつたのです。

一、ハンナの苦しみ

エフライムの山地ラマタイム出身のツフ人エルカナには、ハンナとペニンナという二人の妻がありました。エルカナがどうして二人の妻を持つようになったのかは聖書に記されていません。最初の妻のハンナに子どもがなかったことが原因のようです。その結果、ハンナは非常に苦しみと悲しみを経験する日々となりました。

ペニンナは最初こそ第二夫人として控えていました。ところが、子どもを宿し授けられると、子どもがいないハンナを見下し、軽蔑し、優越感をもってハンナを苦しめ

るようになりました。

エルカナ一家は、悪い時代の潮流に流されず、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な家族でした。そこで犠牲をささげた後、感謝と和解のいけにえを食べたのです。エルカナがいけにえを分けるのですが、その大部分がペニンナの側の家族に与えられました。というのは、ハンナには子どもがいないので自らの分しか与えられなかったからです。その時は、ハンナにとって最も厳しい試練の時でした。というのは、ペニンナがこの機会を利用し、ハンナの弱みにつけ込んで悩ませ続け、神を恨ませようとさえたからです。

二、ハンナの祈り

ハンナは余りの悲しみと苦しみのために「泣いて、食事をしようとしなかった」のです。そのハンナに対してエルカナは「あなたにとつて、私は十人の息子以上の者ではないか」と言つて、愛と優しさをもって慰めました。しかし、それでもハンナのたましいに刻まれた大きな傷は、いやされることはありませんでした。

その時、ハンナは主に心を向け、「激しく泣いて、【主】に祈った」のです。確かに主が胎を閉じられたことが、

悲しみと苦しみの始まりです。しかしハンナは、人間の力や知恵、経験でどうすることもできない状況に追い込まれた時、神とみ言葉に正面から向きあったのです。

ハンナには子どもがないことが苦しみでした。しかし、祈り求めているうちに、自分の求めが吟味され、子どもが与えられることの意味が変えられたのです。与えられた子どもは一生の間主に仕えるために主にささげる、というものでした。これはナジル人としての誓願です。

ハンナは心のうちで主に物を言い、祈りに祈り、祈り拔きました。ところが祭司エリはハンナの祈りを誤解します。彼女が酒に酔っていると思ったのです。そこで「いつまで酔っているのか。酔いをさませい」と命じました。そこでハンナの控えめな説明を聞き、事情を知ったエリはハンナの願いが聞かれるようにと祝福を祈ったのです。

三、ハンナの純真な信仰

祈りに祈り、祈り抜いた結果、〈食事した。その顔は、もはや以前のようではなかった〉のです。このことは彼女の純真な信仰をあかしし、またその重荷を主にゆだねたことのあかしです。ハンナは自分の願いが実現する前

にすでに子どもが与えられると確信し、信仰によって子どもをささげる決心をしたのです。

ハンナは祈りの中で条件をつけず明け渡しました。その結果、ハンナは、「…がでありさえすれば」から「…がなくとも」の信仰に変えられたのです。すなわち、神への信仰、絶対信頼の信仰（ヘブル11・6）です。神はハンナの祈りと信仰を覚えて、顧み、男の子を与えられました。

ハンナはその子をサムエル（神の名・神に求めた者）と名づけました。ハンナは喜びのあまり、主に誓ったことを忘れるような不信仰な者ではありませんでした。祈りの中で誓った通り、乳離れした幼いサムエルを、主の宮に連れて行き、そこで一生神に仕える者として、ささげたのです。

結論

サムエルの母、ハンナは子どもが与えられないため、非常な苦しみと悲しみの中を通りました。しかし、そのような状況の中にあっても、神を信じ、祈り、神のみわざがなされました。私たちもハンナの信仰と祈りに倣う者となりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 エフライム もともととは地域の名で「実り豊かな地」という意味を持っていたようである。

2 二人の妻 当時は族長時代と同じく、一夫多妻という制度は何の問題もなく前提されていたし、律法もそれを認めていた(申命記21・15)。しかし、神の本来の御計画は、生涯を通じて一人の夫が一人の妻をもつことである(マタイ19・8・9)と、イエスは言う。聖書において、このような重婚の場面では、それに伴う困難もあわせて描かれていることがしばしばである。ハンナ 「いつくしみ」という意味の名。

3 シロ 会見の幕屋があった場所(ヨシユア18・1、士師18・31)。また3・3では、このころ契約の箱もこの地に移されていた。毎年いけにえを献げることになっていた エルカナ一家は、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な一家であったようである。ホフニとビネハス 2・12以下参照。ここではその伏線。またエルカナの家庭とエリの家との比較をする上でも3節後半の黙

想は欠かせない。万軍の主 旧約聖書では、ここで初めて用いられている、神を描く際の重要な表現。この句は様々に説明されてきた。「万軍」の主とは、大いなる創造神に属するものであり、太陽、月、星、また天使や人間をも支配する支配者である。この言葉は、神の権能と栄光を表す称号となった。

4・5 特別の受ける分 犠牲を献げた後の家族の祝いにおいては、感謝のいけにえや和解のいけにえは食べることができた(レビ7・11・18)。エルカナはこのいけにえを取り分け、自らの家族に分け前として与えるのである。ペニナとその子たちにも分け前として与えられる。しかし、ハンナには子がいないので自らの分しか与えられないのである。

古代イスラエルでは、子どものいない妻は何がしかの神の不興を買っていると考えられた(「アブラハムとサラ」、「ヤコブとその妻たち」、「ザカリヤとエリサベツ」の物語など参照)。

9 段落が変わっている、ここからの物語がサムエル誕生の前年のことであろうと考えることもできるが、前節からのつながりから考えて、7節後半からがサムエ

ル誕生の前年の出来事であるという見方もある。飲食4節以降の情景を参照。エリ「神は高くあげられる」という意味の短縮名。シロの祭司。

11 誓願を立てて いわゆるナジル人としての誓願を指す。

13 酔っているのだと思った 祭司エリがこのように思ったことの背景として、古代イスラエル人の祈りが、本来は神の前で叫び求める祈りであったこと（詩篇18・6、77・1など）が背景として考えられる。当時、黙祷は非常に珍しかったようである。実際、ハンナは悲しみのあまり声も出なかったのかもしれない。また当時、巡礼の祝宴で、このような酔態は珍しくなかったようである（イザヤ28・7、士師9・27など）。

15 【主】の前に心を注ぎだしていた この表現は、灌祭（注ぎのささげ物）に用いられる表現である（出エジプト29・40）。灌祭は、祭壇の上にささぐべきものとされておおり、ハンナはこの祈りの場を祈りの祭壇ととらえていたのかも知れない。

16 よこしまな女 多くの訳語がある言葉である。「悪い女」（口語訳）、「墮落した女」（新共同訳）、「ベリアル

の娘」（ベリアルとは、無価値、邪悪な、という意味の言葉であり、後に悪魔という意味に転化されている）など。

17 エリの祝福の宣言であり、またとりなしの祈りでもある。祝福には力があり、また有効なものであると信じられていた（創世記27）。

18 食事をした 「ハンナは泣いて、食事をしようとしてもなかった」（7）との対比に注目。外見的には彼女の状況は何ら変わってはいなかったが、今や彼女は喜びにあふれていた。主が彼女の祈りを聞いて下さったという確信と、祭司を通して与えられた主の祝福の結果である。

19 知った 知的に知るという意味ではなく、人格的に知るといふ、より深い意味を持つ。

20 サムエル 文字通りの意味は、「神の名」または「敬虔な名」。その子を祈りの応答として得たので、ハンナはその子に敬虔な名と性質とを求めたのであろう。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）、W・T・パーカイザー『ウエスレアン聖書注解 サムエル記第一・第二』（イムマヌエル総合伝道団）

聖書

Iサムエル3・1〜14

タイトル

幼子サムエル

暗唱聖句

【主】よ、お話しください。しもべは聞いております。 Iサムエル3・9

目 標

日々、神のみ声を聞いて生きる。

サムエルってどんな人

(櫻井めぐみ)

サムエルは旧約時代のイスラエルを代表する、偉大な預言者の一人です。サムエルは後に、イスラエルの王となるダビデに任命の油を注ぐという大役を果たしたりしました。サムエルのお母さんは、ハンナという女性です。ハンナは昔、いじめに悩んで神様に本気で祈ったことがありました。サムエルはその祈りの結果として誕生した子どもなのです。私たちが経験する悩みが、神様への本気の祈りへと向かわせ、神様のすばらしい祝福をもたらすのだということがわかります。

ところでハンナは、まだサムエルが生まれる前に、このように祈っていました。「男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、主にお渡しします。」もし神様が自分に子どもを与えてくださったなら、その子を一生の間、

神様に仕える者としておさげしますと祈ったのです。そうしてサムエルが生まれました。サムエルがある程度大きくなった時に、ハンナはサムエルを、神殿で主に仕える者とするために、祭司エリのもとに連れて来ました。こうしてサムエルはエリの見習いとして、神殿に住み込みで働くことになったのです。

祭司エリとその息子たち

それでは、サムエルを指導したエリはどういう人だったのかを見てみましょう。エリは祭司として、またイスラエルの指導者として人々から尊敬されていました。ところが、エリの二人の息子は神様に背いて、悪いことを平気で行っていました。エリは父親としても祭司としても、この二人を厳しく正さなければならなかったのに、その責任を果たしていませんでした。自分の息子たちを治めることができないのに、どうしてイスラエル全体を治めることができるでしょう。神様の教えに対するあいまいな姿勢は、神様との関係を損なわせることになりました。今日の聖書のはじめの方に、「そのころ、【主】のことはまれにしかなく、幻も示されなかった。」とあるのは、そういったことが原因でした。神様と人々との生き

生きとした関係が失われつつあるような時代でした。そういう時に、子どものサムエルは神様にお仕えしていたのです。

主を知る

すっかり年をとって目が見えなくなったエリは、サムエルに務めを任せていました。サムエルはまだ少年でしたが、エリの後継者として祭司の働きを行っていたのです。しかしサムエルは、直接的にはまだ神様を知りません。そして、神様のことを直接聞いたこともありませんでした。サムエルはこれまで両親やエリから教えられた、神様についての知識しかありませんでした。みんなはどうでしょうか。神様を「知って」いますか？ この場合の「知る」とは、「神様についての知識を持っている」ということではありません。神様についての知識なら、みんなは教会でも学んでいます。でも、神様を「知る」ということはもっと深い意味があります。神様が、自分という一人の人間に親しく関わっておられることがわかりますか？ ということなんです。みんなはどうですか？ 最初サムエルがそうだったように、みんなもまだよくわからないかもしれませんね。でも、みんなもサム

エルのように「主を知る」ことができるのです。

神のみ声を聞いて

しかし、一体どうしたら神様を知ることができるのでしょうか。それは、神様のみ声を聞く―つまり、神様のことに聞くことなのです。そもそも、私たちが神様に祈ることはとても大事なことです。でも実は、もっと大切なことがあります。それが、神のこばを聞くことなのです。神様の声が直接聞こえなくても、みんなが祈る時、沈黙のうちに神様の思いを知ることもあるでしょう。でもいちばん間違いない方法は、聖書のみことばに聞くことです。みんなもサムエルと同じようなもので、聞き違うことがあるかもしれないからです。聖書は絶対に間違いのない、神様のこばです。だから神様のこばを聖書で聞くことで、サムエルと同じように神様を知ることができのです。みんなもサムエルのように、神様に向かって言ってみてください。「主」よ、お話しください。しもべは聞いております」そして語られる神様のこばを、喜んで聞きましょう。

♪両手いっぱい愛（PW13、新聖歌483、ホ146他）

聖書 Iサムエル3・1～14

テーマ 幼子サムエル

序論

(福井文彦)

サムエルはモーセ以後に出た最初の大預言者であり最後の士師です。彼が仕えていた祭司エリは老齢のために指導力と霊的な鋭さを失い、彼に代わる後継者として、神の目はサムエルに向けられていました。そのため、神は経験もないサムエルに語られます。その結果、サムエルは「神を知り」、預言者としての一步を踏み出すのです。

一、神に仕えたサムエル

ハンナには子どもがなかったが、その信仰と切実な祈りによってサムエルが与えられました。彼女は主に誓ったように乳離れした幼いサムエルをシロの聖所、エリのもとに連れて来て主にささげたのです(1・26～28)。

それ以来、(少年サムエルはエリのもとで【主】に仕えて)いました。口語訳では「わらべ」とありますが、必ずしも年齢的な「幼な子」ことではなく、歴史家ヨセフスは、サムエルは12歳を過ぎていたと言っています。ところがサムエルが育ち仕えた時代、エリ家を中心とする

荒れすさんだ状況で、人の目をくらませ、神への思いを失わせていました。すなわち、霊的に枯渇していたのです。そのことを、(そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった)と述べています。

しかし、サムエルは夜、熟睡している時でも、間違いはしましたが、エリが呼んでいると思えば、直ぐ起きてエリの所に飛んで行きました。その姿からもわかるように、サムエルは熱心に喜びをもって神に仕えていたのです。このサムエルに神はお心をとめられたのです。

二、神の声を聞いたサムエル

〈神のともしびが消される前であり〉とありますから、夜明け前の頃のことです。エリは(自分のところで寝ていた。彼の目はかすんできて、見えなくなっていた)のです。そのためサムエルは、(神の箱が置かれている【主】の神殿で寝て)いました。

すると、主は(サムエル、サムエル)と呼ばれたのです。彼はびっくりエリに呼ばれたのだと思い、(はい、ここにおります)と言って、起きてエリの所に走って行きました。そして、(はい、ここにおります。お呼びになりましたので)と告げたのです。ところがエリは(呼んで

いない。帰って、寝なさい」と彼に答えました。そこでサムエルは帰って寝ます。このようなことが二度、三度続きました。

なぜサムエルは、直接主が彼に語りかけておられるのに気がつかなかったのでしょうか。それは〈まだ【主】を知らなかった〉からです。サムエルの知っていた神は、日常のしきたりによって礼拝される神、エリを通して知る神でした。つまり、「主を知る」と「主について知る」とことは別なことです。「主を知る」ということは、み言葉によって、人格的、主観的な関係により、個人的に深く知ることです。その意味でサムエルは主を知らなかったので何度もエリの所に行ったのです。

三度もサムエルがエリの所に來た時、老人のエリは、ようやく主がサムエルに語っておられるのだと悟りました。それで、再び呼ばれた時は、〈『主』よ、お話しください。しもべは聞いております』と云いなさい〉とサムエルに教えたのです。

四度目も主は以前と同じようにそばに立たれ、〈サムエル、サムエル〉と呼ばれました。サムエルはすぐに〈お話しください。しもべは聞いております〉と答えました。

こうして、サムエルは生まれて初めて神の声を、神の声として聞きました。その内容は神の人エリの家への恐ろしい預言、想像を超えた厳しい宣告でした(11、14)。エリの家^{とが}の咎は、いけにえによっても、穀物のささげものによっても、いかなる犠牲によっても永遠に償うことのできないものでした。

サムエルはのち、主の言葉によって現れた神を知っている者として、神の声を聞き、また神の言葉を語る預言者として、イスラエルの歴史の中で非常に大切な人物となっていたのです。

結論

私たちの信仰生涯の中で、「神の声を聞く」ことほど大切なことはありません。神は今も、サムエルのように、神の声を聞こうとする心備えのある人を求めておられます。

神の声を聞き続けるためには、神との交わりを持つことが基本です。そして祈りの内に神の声を聞きましよう。聖書を読んで、黙想し神の声を聞きましよう。人の声ではなく神の声を聞いて、サムエルのように自分を神にささげて従いましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 少年 子(1・22)、幼子(2・11)、などと同じ言葉。しかし、必ずしも年齢的な「幼な子」と考える必要はない。この言葉はいわゆる「若者」というニュアンスも持っており、どちらかといえば「未熟さ」を表す言葉であろう。なお、ヨセフォスという歴史家は、当時サムエルは既に12歳を過ぎていたと記録している。**【主のことばはまれにしかなく** エリとその息子の時代の霊的低迷を反映している言葉かもしれない。また、過去の士師の時代とこれからの預言者たちの活動の時代とを分ける意味の言葉であるのかもしれない。

2 **彼の目はかすんできて** エリ自身の高齢であることを示すと同時に、前週の物語よりかなりの時間の経過を示す言葉でもある。同時に4章以下の伏線ともなっている。エリの霊的な意味での「目のかすみ」を示す言葉である。またこのことが、サムエルが「聖所」に泊まってその務めを果たしていた理由とも考えられる。

3 **神のともしび** 出エジプト25・31〜40に描かれてい

る、7つの枝のある燭台ではないかといわれている。この燭台は、神の契約の箱が入れられている至聖所の外の聖所におかれていた。**消される前** 夜明け前の頃のことであろう(レビ24・3)。**神の箱** 神の臨在の象徴とされた箱。中には契約の石板(十戒)が納められており、「契約の箱」と呼ばれる場合も多い。ヨルダン渡河ではこの箱を先頭にして祭司が立ち(ヨシュア3・13)、カナン入国後はシロの神殿に安置された。4章ではベリシテの戦いでこの箱が戦場に出陣してベリシテに奪われてしまうのだが(4・11)、後には返還されてキリアテ・ヤリムに安置される(7・1)。最終的にはダビデがエルサレムに移した(Ⅱサムエル6・12)。**サムエルは、神の箱が置かれている【主】の神殿で寝ていた** 前節にも記述しているように、エリの高齢のゆえかもしれないが、そのことをも主が用いてくださったと、サムエルの召命という出来事を主が起こしてくださったとみるべきであろう。イザヤの神殿の幻(イザヤ6章)、ベテルにおけるヤコブの幻(創世記28・11〜18)にも、神殿における召命は見取れる。

4 聖書によって多少訳し方が異なるが、内容そのものには大差はない。

5→9 このような物語の中で、反復の意図するところは重要である。これは、緊張感を高め、召命に対する現実感を聴衆に呼び起すのに一役買っている。一方で、祭司エリは勘違いをして3度にわたってこの少年を下がらせる。先週の個所と相まって、善良ではあるが霊的に少々抜けているエリの人柄を描き出している。

7 【主】を知らなかった 一般的な信仰や敬虔さの意味ではなく、個人的直接的語りかけ、という意味の「知る」。本節では、「主を知る」ということと、「主の言葉」とが並んで語られる。それは、主を知るということは、人間の知覚的、客観的な対象として「主を知る」ということではなくて、その御旨をみ言葉によって知るといふ人格的、主観的な関係における「知る」ということなのである。

9 前節後半より、エリはサムエルの上に起こっている出来事を自らの経験によって察した。こうしてついにエリはサムエルに適切な指示を出すことができたのである。

10 【主】が来て 語りかけるばかりでなく、目に見える形でそばに立った、すなわちここでサムエルは、言葉

と幻の両方を受けたのである。この行為は、「お話しください。しもべは聞いております。」という信仰の姿勢に対する語りかけである。

11 両耳が鳴る 想像を超えた厳しい宣告がなされるときの表現である。特に、災いの知らせやその知らせに圧倒されるときに慣用的表現でもある（Ⅱ列王21・12、エレミヤ19・3）。

12→14 エリは最後には、その息子たちと共に破滅の道へと歩まなければならない。これは恐ろしい現実である。彼の罪は、息子たちが何をしていたかを知っていたにも関わらず、彼らのその行いを見過ごし続けてきたからである。エリの家についてわたしが語ったこと 2・

27→36。祭司の罪のためには犠牲の儀式によって備えがなされていた。しかし、それはあくまで誤って犯した罪のためである（レビ4・2）。しかし、エリの息子たちが犯した罪のように、彼らの冒瀆的な行為に對しては、いかなる犠牲によってもとりなすことは不可能であった。永久に その裁きが徹底してなされることを物語る。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウイン『ティンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）他

聖書

Iサムエル16・6～13

タイトル

ダビデの油注ぎ

暗唱聖句

人はうわべを見るが、【主】は心を見る。

Iサムエル16・7

目 標

神が心の中をご覧になるお方であることを知る。

導入

(土屋開夫)

「人は見かけによらない」とよく言いますが、私たちは人の外側しか見れないので、その人の心や性質まではなかなかスグには分かりませんね。例えば、とてもニコニコした顔をしているから「良い人なのかな」と思ったら、実は悪い人だったり。全然、笑わないから「恐い人なのかな」と思ったら、実は優しい人だったり。

前にこんなことがありました。ある風の強い日、道を歩いていたら、後ろの方からトラックが大きな音でクラクションを何度も鳴らすのです。私は「うるっさいなあ。何をブーブー鳴らしてるんだ!」と思っていたら、そのトラックの窓からおじさんが顔を出し、私に向かってこう言いました、「帽子、落ちましたよ!」風でいつの間に

か私の帽子が飛んでいたのを、教えてくれようとしていた親切な人だったのです。「あ、本当だ。どうも!」

そのように、私たちはなかなか人の心の中まで分からないのですが、神様は人の心の中をご覧になるお方なのです!

新しい王を見つけない

さて皆さん、イスラエルの国で一番最初の王様になった人は誰か、知っていますか? そう、サウル王です。でも本当の意味では、イスラエルの真の王様は神様なのです。でも、イスラエルの民が「いや。どうしても、私たちの上には王が必要です。」(8・5)と言って、他の国のように人間の王様を求めました。それで、仕方なく彼らのリクエストに答えて、一人の王を選んだのです。それがサウル王でした。サウル王は背が高く、イケメンで、見かけはとてもカッコよかったのですが、肝心なところが欠けていました。それは「神様に聞き従う心」が欠けていたのです。

そこで神様は、サウル王の代わりに新しい王となる者を捜し、選ばれました。その人はベツレヘムのエッサイ

という人の息子だと言うのです。神様はサムエルさんをエッサイさんの元に遣わされました。

神様を選ばれる人

けれども大変です。エッサイさんには息子がたくさんいるのです。一体、どの息子が新しい王様選ばれた人なのでしょう？

私たちもたくさんの中から一つの道を選ばないといけないことがあります。将来は結婚相手を探すかも知れません。そういう時は、外見で決めてはいけませんよ。人の「心」をご覧になる神様によく聞くことです！

さて、サムエルさんの前にエッサイさんの息子たちが連れて来られました。その中でサムエルさんは、一番上のお兄さんであるエリアブさんを見て、「きつとこの人が神様選ばれた人に違いない！」と思いました。「長男だけあって人生経験も一番長いし、しっかりしていそうだし、背も高い。戦いの時でも一番強そうだ。」そんなふうに思ったのかも知れません。

けれども神様は、「彼の容貌や背の高さを見てはならない。…人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」と言

われました。そうして7人の息子が連れて来られましたが、神様選ばれた人はいませんでした。

でも、まだ8人目の末っ子が残っていました。父親のエッサイさんも「あんなチビっ子は紹介する必要もないだろう」と思っていたかも知れません。でもその子が来た時、神様は「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」(16・12)と言われました！それがダビデでした。

神様はダビデの心の中を見ておられました。ダビデには、神様をおそれ敬い、聞き従う心がありました。それは何より一番大切なものです！それはまるで羊が羊飼いにどこまでもついて行くのに似ています。

まとめ

さあ、私たちの心の中はどうでしょう？ 羊飼いであるイエス様についていく羊のようでしょうか？ でも、こうしてみんなが教会学校に来ているということは、実はみんなもイエス様から既に選ばれているんですよ！

♪主は僕らを用いてくださる♪(PW59)

聖書 Iサムエル16・6〜13 テーマ ダビデの油注ぎ

序論

(福井文彦)

イスラエルの最初の王であるサウルは、神への不服従のため主から捨てられました。サムエルはこのことをひどく悲しみましたが、いつまでも悔やみ続けることは許されませんでした。現実にサウル王がまだ支配しているにも関わらず、神は次の王を選ぶようにサムエルに命じられたのです。そこで選ばれたのがダビデだったのです。

一、人の選び

サムエルは神がサウルを捨てられたことを悲しんでいました。すると、「さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから」(1)と告げられたのです。そこで、サムエルはベツレヘム人エッサイのところへ出かけました。

主は、サムエルに、どの息子に油注がれるかを明らかにしておられませんでした。エッサイの息子たちを見た時、サムエルは直感的に、神が選ばれたのは長男エリア

ブであると思ったのです。彼は背が高く、外見的には申し分がなく、王者の風格があつたからです。年老いた父親も選ばれるのは長男であると考えていました。

ところが、主はサムエルに「人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る」と言われたのです。そこで「エッサイはアビナダブを呼んで、サムエルの前に進ませ」ました。するとサムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言いました。そこでエッサイはシャンマを通らせましたが、サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言いました。エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせますが、サムエルは「【主】はこの者たちを選んでおられない」と言ったのです。

二、主の選び

神はこの家族を指示されたのに、その中に王に選ばれる者がいないなどということがあり得るのだろうか、サムエルは一瞬思ったことでしょう。そこでサムエルはエッサイに「子どもたちはこれで全部ですか」と尋ねました。するとエッサイは「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています」と答えました。彼は、兄たち

がいけにえの食事を楽しんでいる間、羊の番をしていたのです。

この末の子がダビデです。彼がいけにえの席に呼ばれなかったのは未成年者はいけにえの食事の席につかないというしきたりのためかもしれません。しかも、羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使がする卑しい仕事でした。ですから、彼は家族の中でそれほど気にとめられていない一員であつたと思われます。

しかし、神が人をお選びになる時、「外見」は関係ありません。神にとつて問題なのは「心」です。それで、（人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る）と言われたのです。その意味は、「人は自分の目に従つてものを見るが、神はご自分の心に従つて見られる」と言うことです。人間の弱さを知り尽くしておられるお方として、あわれみに満ちた心によつて見られた結果、ダビデを選ばれたのです。

三、心を見られる神

ダビデへの油注ぎと同時に、主の霊がダビデの上に激しく下りました。後にサウル王の侍従となり、ゴリアテとの戦いで勝利し、名声は全国にとどろきました。しか

し、このために王のねたみを買ひ、ここからダビデの苦難の生活が始まつたのです。十数年の苦難の後、ギルボア山頂でサウル王が戦死し、ダビデは王となります。そして、エルサレムを礼拝の中心として、政教一致をはかり、敵国を徹底的に撲滅し、王国の拡張と繁栄をもたらします。彼の成功の秘訣は、ただことごとくに主に聞いて行ふことでした（Ⅱサムエル5・17～25）。

しかし、このダビデにも失敗がありました。バテ・シェバの事件、子どもとの血を血で洗うような争いです。また晩年ダビデの行つた人口調査は神の怒りと裁きを招きました。ダビデは偉大な指導者でしたが、このように完全無欠ではありませんでした。しかし、絶えず砕かれた心をもつて悔い改め、神の赦しと恵みにあずかりました。それゆえに、神に愛されたのです。神は心を見られますが、偽善でない心、砕かれた心、混じりけのない純粋な心で神を求める人を喜ばれるのです。

結論

心を見られる神に喜ばれる秘訣は、キリストの血に対する信仰（ヘブル9・13～14、Ⅰヨハネ1・7）と純粋な心で神を求めることです。

研究資料

(宮澤清志)

本日の聖書の箇所は1サムエル16・6からであるが、意味としての区切りは1節から始まる。サムエルはサウルの失敗をいつまでも悔やみ続けていることはゆるされなかった。主はサウルを退けるだけで、王位自体の存続については御心を変えることなく適材を探し求められたのである。

一方サムエルは非常に恐れた。なぜなら、このことがサウルに見つかれば殺されてしまうのではという恐れがあったからである。しかし、天の下のすべての事は、神のイニシアティブのもとで進行する。私たちの信仰は、このイニシアティブをとられる神に全権を明け渡し、注意深く、かつ大胆に従っていく信仰でなくてはならない。本日を中心であるダビデへの油注ぎの箇所も、神がイニシアティブをとられた典型ともいえる箇所であり、その従い方は、形だけの従い方ではなく、心からの従い方ではなくてはならないのである。

テキスト

6 エリアブ 「神は父」という名。サムエルは、エリアブの容姿や身体に強い印象を受け、彼こそが油注がれるにふさわしい人物であると判断した。

7 彼の容姿や背の高さを見てはならない サウルが誰よりも背が高かったこととの意図的な対比が語られているのかもしれない。しかし、この容姿が、彼が適任であることを妨げるものではない。外的な容姿それ自体は神からの好意のしるしである(9・2、10・23のサウルの姿や12節のダビデの姿を参照)。人が見るようには見ない 直訳は「人が見ることではない」この言葉は預言者の格言となつたのである(1歴代28・9参照)。人はうわべを見るが、「主」は心を見る サウルは誰しもが賛美する背の高さ、美しさによって選ばれたが、ダビデは「心を見る」主によって選ばれた。

10 七人の息子をサムエルの前に進ませた サムエルはエッサイの7人の息子を年齢順に通らせたのであろうが、その誰も、主はお選びにならなかった。具体的に、サムエルは神意を伺うのにどのような方法を取ったのかは定かではないが、彼はサウルを選ぶにあたってはくじ

を用いた(10・20参照)。よって今回もくじを用いて神意を伺ったであろうことは推測できる。こうして彼はこの7人の息子のほかにも子がいたのであろうと推測したのであろう。なお、この当時の神意を測る一般的な方法は、くじであった。

11 **まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています**
父エッサイがダビデをこの席に呼ばなかったのは、当時のしきたりで未成年者はいけにえの食事の席にはつかなかったということが考えられる(5節には、サムエルがこの席を設けた理由が語られる)。しかし同時に羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使に託された卑しい仕事であった。

12 **血色がよく、目が美しく、姿も立派だった** ここに、いわゆる「紅顔の美少年」という言葉を当てはめるべきではない。当時、こうした外見上の美しさは神の恵みと考えられていたし、サウルもまたそうであった(9・2)。しかし、聖書における美しさとは、外形上のことだけでなく、優美な魅力と強い意欲、行動をも伴ったものであった。イザヤ53章の主イエスのお姿をここで思いめぐらすことは必要なことであろう。

13 **彼に油を注いだ** 旧約聖書においては、王と祭司は頭に油を注がれる行為をもつて就任した。この油注ぎは、神の代理者をもつて行われた。この「油注がれた者」が神の民を統治するとき、神は油注がれた者を通して王権を行使されたのである。その結果、**主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った**。将来において何が待っているとしても、神の備えがあるということの確信となり、また保証ともなった出来事であった。

なお、この言葉とともに、次節の「主の霊はサウルを離れ去り…」という言葉も同時に思いめぐらすべき言葉である。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』、榊原康夫『新聖書注解 旧約2『サムエル記第1』』(以上いのちのことば社)、山我哲雄『新共同訳旧約聖書注解Ⅱ『サムエル記上』』(日本基督教団出版局) 他

聖書

Iサムエル17・31～51

タイトル

ダビデとゴリヤテ

暗唱聖句

この戦いは【主】の戦いだ。主は、おま
えたちをわれわれの手に渡される。

目標

Iサムエル17・47
共におられる神に信頼して、大きな困難
にも立ち向かう。

導入

(土屋開夫)

先週は、イスラエルのサウル王様に代わる新しい王様として、ダビデさんが神様から選ばれた場面でしたね。でも、ダビデさんが新しい王様として選ばれたからと言っても、すぐ王様になる訳ではありません。まだダビデさんは若かったのです。15歳か16歳ぐらいだったかも知れません。でも、そんなに若くても、神様を信じる心は他の兄さんたちや大人たちにも負けない、純粋な信仰でした！

ゴリヤテ現る！

さて、そんなある時、ペリシテ人がイスラエルに戦い

を挑んできました。ペリシテ人は、イスラエルの南西の海岸の近くに住んでいる民族で、その当時、最も手ごわい敵でした。

(※旧約聖書の時代は、神様の命令によってイスラエルを守るための戦いをしました。けれども新約聖書の時代の私たちは人間相手の戦争をしてはいけません。イエス様がそのように教えられたからです。)

そのペリシテ人の中の一人の代表の戦士が、1対1の戦いを挑んできました。その名はゴリヤテ！ゴリラみたいな怖そうな強そうな名前ですね。なんと、その身長は3m弱(約286cm)。今でも世界で一番背が高い人は、それくらいの人がいるそうです。

それだけでなく、かぶとも、よろいも、バッチリ身につけ、手には大きな槍も持っているのです！もはや人間というより怪獣です。イスラエルの中には誰もゴリヤテと戦う勇気のある者はいませんでした。「気をくじかれて非常に恐れた」(17・11)。勿論、サウル王様もそうでした。無理ありません。こんな大きな敵を前にしたら、恐れてしまうのが当然です。

信仰の勇者ダビデ

けれども、そこにダビデさんがやってきました。お父さんに頼まれて、戦場にいる兄さんたちにお弁当を届けつつ、様子を見に来たのです。

ダビデはゴリヤテを見ました。そして、なんとサウル王様にこう言いました、「このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います」(17・32)。ええー、本気で?!

ダビデさんは、なぜそんなことが言えたのでしょうか? そんな勇氣はどこから出て来るのでしょうか?

ダビデさんはもつと若い時から、神様を信頼して、神様と共に生きて来たのです。お父さんに頼まれて、羊の群れをずっと守って来ましたが、危ういピンチが何度もありました。羊を狙うライオンや熊が襲って来ることもあったのです。けれどもダビデさんは、共にいてくださる神様を信じ、命がけで勇敢に戦い、神様の守りと勝利を経験してきたのです。ダビデさんの勇氣は、その神様を信じる信仰から来ていたのです!

主の戦い

ダビデさんはゴリヤテに言いました、「…剣や槍がな

くても、**【主】**が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは**【主】**の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される」(17・47)。

ダビデさんが戦った最大の武器は「信仰」でした! これまで通り、神様が必ず救いと勝利を与えてくださると信じていたのです! そして他人の借り物ではなく、自分に与えられているものを使って、強敵ゴリヤテに見事勝利しました!

まとめ

先生はこの聖書のお話が大好きです。ゴリヤテのような恐い敵、難しい問題にぶつかる時、ダビデさんの信仰を思い出します。「イエス様が共にいてくださる、イエス様が必ず助けてくださる!」そう信じて、必死にお祈りしながら、前に進もうと思います。

皆さんも恐いことや心配なことがある時、強いイエス様が必ず助けてくださることを信じてくださいね! 勝利はイエス様が与えてくださるのです!

♪おそいくるライオン♪(こ66、こ改48)

聖書 Iサムエル17・31～51 テーマ ダビデとゴリヤテ

序論

(福井文彦)

この箇所は、多くの人たちが良く知っているダビデとゴリヤテの物語です。サムエル記第一の中で最も有名な、この書の中心部分でもあります。これは単に、若者ダビデがイスラエルの恐れていたゴリヤテを倒して勝利したという物語ではなく、ダビデの信仰による勝利です。

一、ゴリヤテの挑戦

イスラエルはエラの谷でペリシテと対峙^{たいじ}していました。その時、ペリシテの中から、ガテのゴリヤテが戦いを挑むために出て来て、四十日間、朝夕叫びました。彼は両軍が戦うよりもそれぞれ一人ずつ代表を選び決着をつけようと提案したのです(8～9)。

ゴリヤテはペリシテ人の代表戦士であり、無敵と考えられていました。ですから、イスラエルの軍勢は震えながら、彼が大きな叫び声を上げるのを聞いているだけでした。イスラエルのだれ一人、その挑戦を受けて立つことができなかったのです。

ダビデは父エッサイの命令で、戦場にいる兄たちの安否を知るために、イスラエルがペリシテと対峙している戦場に来ました。そこで、ゴリヤテの威嚇^{いかく}する叫びを聞き、それを非常に恐れているイスラエルの人たちを見ました。しかし、ダビデは、誰^{だれ}であれ、いかに強くとも、イスラエル(の神)が侮辱^{いぶる}されることに怒りを感じたのです(26)。

二、ダビデの挑戦

ゴリヤテの挑戦に対して戦おうとしているダビデを、サウル王は呼び寄せて確かめました。するとダビデは「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います」と大胆に申し出たのです。彼は、これは神とペリシテ人との戦いであり、むしろ、この挑戦を神の御力を証明する好機とみなしたのです。

しかし、サウルは「おまえは、あのペリシテ人のところへ行つて、あれと戦うことはできない」と止めました。というのは、サウル王の目には、軍人で見えるからに強そくなゴリヤテと違い、ダビデは若年で戦争の経験がなく弱々しく映ったからです。そこでダビデは、獅子、ある

いは熊が来て羊を取った時、獅子、熊を撃って羊をその口から救い出した経験を話しました。この神はダビデを、獅子や熊から救い出したお方であり、生きておられるがゆえに常に救うことができるのです。それゆえダビデは「主」は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください」と確信できたのです。この力強い神の守りの証しを聞いたサウル王は安心し、ダビデがゴリヤテと戦うように、「行きなさい」と送り出しました。

三、信仰の勝利

そこでサウル王は「ダビデに自分のよろいかぶとを着けさせた。頭に青銅のかぶとをかぶらせて、それから身によるいを着けさせた」のです。しかし、ダビデはそれを脱ぎ捨てます。ダビデは初陣の青二才に過ぎないのに、戦いのためゴリヤテとは対照的な準備をしました。槍の代わりの杖、弓の代わりの石投げ、矢筒の代わりの羊飼いの使う袋、矢の代わりの滑らかな石五個でした。

一方のゴリヤテはまるで戦車のように甲冑かちうで身を固め、非常に頑丈がんじょうな攻撃用の武器を手にしていました。ダビデよりもはるかに背が高く、熟練した兵士でした。ゴリヤテは自分の戦果を誇り、これから成し遂げようと

していることまで自慢げに語りました。しかし、ダビデは「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしつたイスラエルの戦陣の神、万軍の「主」の御名によって、お前に立ち向かう」と、ただ神に信頼して戦いに挑みました。

見守る者たちが待つ暇もなく、対決は終わってしまいました。ダビデが袋から取り出した一つの石を石投げで投げて、ゴリヤテの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつ向きに地に倒れました。ダビデはゴリヤテの剣をとって、彼の首をはね、殺しました。その結果、ペリシテ人は総崩れとなりイスラエルが勝利したのです。

これは主の戦いであること(47)、そして、主は必ず勝利を与えてくださるとの神への信頼と確信をもって、敵に向かった信仰による勝利です。

結論

人生にはさまざまな戦いがあります。しかし、どんな時も、ダビデのように神を信じ、神に頼る、神への絶対依存の信仰に立つことです。ダビデが谷間から石を拾い上げたように、密室の祈りによってみ言葉を受け、これを御霊の力によって用いることが勝利の秘訣です。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

32 あの男 ギリヤテのこと。実は、12〜31節までは、ギリシャ語訳旧約聖書（70人訳聖書）には記されていない箇所であり、普通に読んでみるとつながりが不自然と思われる箇所もあるのはそのためである。あの男のために、だれも気を落としてはなりません という言葉は11節からつながると考えるとつながりやすくなる。

33 まだ若い ダビデは年若く、また新たに宮廷に召された者であった。またこのような戦闘に不慣れでもあったというのである。次のギリヤテと対照していることは明らかである。若いときから戦士 いわゆる職業軍人。またこのギリヤテは異民族の傭兵であったのではないかという見方もある（サムエル下21・22、歴代下20・8）。

34 獅子や熊 ライオンや熊は、聖書時代のパレスチナ一帯に広く生息していたと考えられている。アジアのライオンはアフリカのライオンと大変類似しており、それらが旧約聖書に言及されている頻度（約130回）から、ライオンは聖書時代のパレスチナにはごく普通に見られた動

物であったのであろう。一方熊もパレスチナ一帯には広く生息していたと考えられている。聖書の語順についてであるが、ライオンは比較的行動の予測がつきやすい一方、熊は何をするか分からないとされており、特に飢えた熊は凶暴であったといわれており、獅子↓熊↓あのペリシテ人という順序で危険度が増すということである。

37 獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった
【主】は、… ダビデは、このような獅子や熊からの救出の背後には主がおられたことの確信があった。このお方は生きているがゆえに、常に私たちを救うことができるのである。後半のダビデの告白は、この確信からきた言葉である。

38〜40 サウルはダビデに自らのよろいかぶとを身につけさせようとした。一国の王が自らのよろいかぶとを貸し与えるということは、サウルがこの戦いに対して並々ならぬ戦いとなるであろうことを認めていたのであろう。しかしダビデは大柄なサウル（10・23）のよろいかぶとを身につけることはできなかった。借り物の武器では動きが取れなかったのであろう。そこで、彼は自らの慣れ親しんだ方法で戦うことを決意する。

40 五つの滑らかな石 なぜダビデが石を五個取ったかはわからない。おそらく一個でも問題なくゴリヤテを倒すことはできたであろうし、石五個をすべて使い切ったとしても何の問題もなくダビデは勝利者でありえただろう。しかし、敵はゴリヤテではなく、ペリシテの全軍である。

41〜42 血色の良い、姿の美しい少年 ダビデに対して、完全重武装（4〜7）したゴリヤテが侮った（42）ことはわからないでもない。

43〜44 ゴリヤテの侮りの言葉。この言葉から、ゴリヤテが相手であるダビデを見て、侮り以上に侮辱の感情さえ抱いたことを示唆している。

43 70人訳聖書では「杖と石をもつて向かってくるとは、俺は犬なのか？」そこでダビデは言った「いや、犬よりも悪い」。犬 この言葉は今でも中近東では侮蔑の言葉とされている。

44 おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう イスラエル人にとって、しかるべき葬りを受けずに遺体が放置されることは、最も悲惨な死に方であり、このことは恐るべき事態であった（Ⅱ列王9・10、詩篇79・2〜3、

エレミヤ7・33等）。

45〜47 ペリシテ人ゴリヤテの侮辱に対するダビデの言葉。この言葉も侮蔑的な響きを持つ言葉で、人間の強さに信頼を置き、ペリシテ人が挑もうとしているイスラエルの神の存在とその力に人間が挑もうとしている姿をあげている。この戦いは、「剣と槍と投げ槍」対「万軍の主の御名」の戦いであり、主の「救い」（47）のための戦いなのである。そしてこの戦いの先には「イスラエルに神がおられることを知らせる」（46）ことを意図する戦いなのである。出エジプトの出来事をはじめ、イスラエルの勝利は神の勝利のあとをなぞったにすぎないのである。

48〜49 ペリシテ人が立ち上がり、近づいてくるのを見て、ダビデは急ぎ走り出て、石投げで石を投げ、ゴリヤテの手の込んだ武器のただ一点の急所を命中させるほどの正確さでこのペリシテ人を倒した。おそらく彼は石投げによって気絶したのである。その後、ダビデはこのペリシテ人自身の剣を取ってその首をはね、絶命させたのである。

参考図書 5月8日分と同じ。

聖書

ヨハネ16・4b〜15

タイトル

聖霊の働き

暗唱聖句

その方、すなわち真理の御霊が来ると、
あなたがたをすべての真理に導いてくだ
さいます。
ヨハネ16・13

目標

聖霊に導かれて歩む者となる

導入

(後藤 真)

大谷翔平選手はすごいですね。野球をやっている人なら、打ち方や投げ方を真似したり、研究したりするかもしれないですね。そうやって、憧れの人の真似をしているとだんだん似てくるのです。

野球選手や有名な人だけではありません。家族や友達でも同じです。いっしょにいる時間が長い人、仲の良い人に影響を受けて、だんだん似てくるというところがあるわたしにはあります。

そうだとしたら、だれに似るかというのがとても大切なことですね。

十字架にかかる前に

イエス様が十字架にかかる前のことでした。イエス様は弟子たちに、これから起こることをどうしても話さなければなりません。イエス様が十字架にかかって死んだら、弟子たちがどうしたらよいのか分からなくなるでしょう。その心の準備ができるように色々とお話したのでです。

イエス様が弟子たちに話したのは次のことです。イエス様がいなくなることも。でもそのことは良いことであること。なぜなら、イエス様の代わりに助け主が送られるからだということ。それはイエス様といっしょにいられると思っていた弟子たちにはびっくり仰天、悲しくなるような話でした。

真理の御霊

イエス様は、イエス様の代わりに来られる「御霊」、別のことばで言えば「聖霊」のことを弟子たちに教えたのです。今日の聖書に書いてあることは、言い方が難しくよく分からない感じがするかもしれませんが。でもまとめて言うなら、聖霊はわたしたちを真理に導くのだとい

うことです。

「真理」というのも難しいことばですね。「確かな証拠で認めることができる本当のこと」という意味です。聖霊はイエス様について本当のことを教え、わたしたちをイエス様に導く働きをします。

イエス様は目に見える「人」としてこの世界を歩んでくださいました。でもそれだと、イエス様に出会えたラッキーな人しか、イエス様を知ることができません。けれども聖霊は、いまは会うことができないイエス様のことを色々な方法で教えてくれます。イエス様に会えなかった人も、聖霊がいるのでイエス様を知ることができるようです。

聖書が分かるようになるのも聖霊の働きです。聖書が分かるようになるイエス様のことが分かるようになります。イエス様のことが分かるようになると、わたしたちはだんだんイエス様に影響されて、イエス様に似てきます。もちろん顔が似てくるわけではありません。神様に従い、人に仕える、イエス様の優しい生き方に似てくるのです。聖霊に導かれるということは、イエス様の生き方の真似ができるようになることです。

ペンテコステ（聖霊降臨日）

今日はペンテコステ、聖霊降臨日の礼拝です。イエス様は十字架で死んで復活し、天に昇りました。弟子たちや仲間たちは、イエス様の約束を信じて、イエス様の代わりに送られる聖霊を待ち望んでお祈りしていました。すると使徒たちに聖霊が降り、使徒たちがイエス様のことを証しはじめたのです。こうして聖霊が降ったことをお祝いするのが、今日、ペンテコステです。

使徒たちの証を聞いて、たくさんの人が悔い改め、イエス様を信じる人の集まり、「教会」ができました。聖霊は、イエス様を信じる人たちを結びつけ、一つにします。聖霊は目に見えませんが、聖霊が作る教会は目に見えるものです。イエス様の生き方を真似する人たちが集まり、いっしょに礼拝し、祈りあい、聖書を学ぶと、もっとよくイエス様が分かるようになります。

ペンテコステの日、わたしたちも聖霊に導かれていることを心に留めて、イエス様にますます似る人になっただきましよう。

♪すばらしい神様♪（PW23）

聖書 ヨハネ16・4b～15

テーマ 聖霊の働き

序論

(小泉 創)

イエスは十字架におかかりになる前の晩、弟子たちに大切なことを伝えました。もうひとりの助け主、聖霊が来られることもその一つでした。

一、去って行くイエス、おいでになる聖霊

イエスが十字架におかかりになり、去っていかれるということは、弟子たちにとってどれだけ衝撃的だったでしょう。彼らの心は悲しみでいっぱいになりました。

しかしイエスは、それは弟子たちにとって益となる、とおっしゃいました。イエスが去られることによって、助け主を遣わして下さるということです。

あなたも頼りになる存在が一緒にいてくれたらどんなにいいだろう、と思うことがおありでしょう。人生の危機的な状況に出会ったとき、病で苦しんでいる人がそばにいるとき、身近な人たちが争っているとき、どうしていいのか途方に暮れたとき、自分には何と力がないかを

思い知らされず。

聖霊である神は天地の始まる前からおられたお方で、旧約聖書にも、福音書の中にも聖霊の働きは記されています。そのお方が助け主として来てくださる、それは素晴らしいことです。しかも肉体をもっておられたイエスは、一カ所にしかいることはできませんでしたが、聖霊は神に向かって叫ぶ私たち一人一人のところにいつも一緒にいてくださるのです。イエスはご自分が去っても、聖霊が来られることがどんなに益になることか、と語られました。

二、聖霊の助け

聖霊は、どのように信じる者たちを助けて下さるのでしょうか。罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさるお方であり、真理の御霊とも呼ばれるお方です。新しいことを教えられるのではなく、イエスが語られていたこと、神のみことばを思い出させてくださいます。聖書には、私たちの信仰生活のすみずみに及ぶ、聖霊の働きの豊かさが教えられています。その一方で極端になる危険性もあります。昔から、「新

しい啓示」と呼ばれるもので人々が惑わされるということとは繰り返されてきました。それらは人の心をひきつけるような目新しい言葉かもしれませんが、聖書の教えと関係がなかったり、反するものであったりするのです。気を付けなければなりません。聖霊が導いてくださるのだから、聖書を読むことも学ぶことも必要がない、という考えも誤りです。私たちは聖霊に頼りつつ、誰かの言葉をうのみにせず聖書に取り組んでいく必要があります。

神と共に生きていくためには、聖霊である神の力、助けを必要としています。聖霊は突拍子もないことをさせるのではなく、イエスが伝えておられたことを深く理解し、そのように生きていく力を与えて下さるのです。

三、神の栄光を現わす

聖霊の働きを通してなされることは、神の栄光を現わすものであるはずです。ある人は聖霊に導かれているといいながら、自分に注目させて他の人を勝手に扱ったり、自分の欲望を満たすために、道をそれたりします。聖霊は誰か特定の人に注目させたりはしません。逆に人は後

ろに追いやられ、イエスの栄光が現わされるはずで

す。また通常は私たちに与えられた理性、知性を用いて導いて下さいます。「啓示」などの直接的な導きに期待し過ぎた人々が、「自分は特別に聖霊に満たされている霊的なエリートである」と思い込むこともあります。純粹だった人が、教祖や救い主のようにふるまい、とんでもない方向に行ってしまった事例はキリスト教の歴史の中で繰り返されてきましたし、今でも見聞きすることです。

聖霊の働きで大切なことは神の栄光があらわれること、神の御名があらわれるようになることです。聖霊の働きは人を大きな存在にせず、小さく弱い人をそれでも用いられる神の素晴らしさ、栄光があらわされ、神の御名があらめられるのです。

結論

助け主を私たちはいつも必要としています。イエスを信じる時にも、信仰生活を歩む時も、あかしをするときもそうです。私たちの日々の歩みを通して神の栄光があらわされることを期待いたしましょう。

研究資料

(辻林和己)

ヨハネの福音書13章から続いて16章は、受難週の木曜日の夜に主イエスが弟子たちに語られたことが記されている。主イエスは弟子たちにこれから起こることを語られる(1〜4)。続いて、聖霊が来られること、聖霊のお働きについて語られる。

テキスト

5 わたしを遣わされた方 父なる神のこと。父なる神が主イエスを地上に送られた。主はご自身の復活と昇天のことを語っておられたが、弟子たちは、主が成そうとしておられること、どこに行こうとしておられるのか、このときはまだ、わかっていなかった。

6 悲しみていっばいになっています 弟子たちは主イエスが自分たちのもとから去り、別の所に行かれるのだと思ひ大きな悲しみを感じていた。

7 わたしが去って行くこと 十字架の死と復活の後、主イエスが昇天されること。**助け主** 原語では[ギ]バラクレートスで元の意味は、「傍らに呼ばれた者」である。そ

れは「弁護者」、「仲保者」等を意味する言葉であり、ここでは「聖霊」のことである。動詞形は[ギ]バラカレオーで、「傍らに呼ぶ」という意味。主イエスが父なる神のもとに行かれ、聖霊を弟子たちに遣わされる。ここで言われる「益」とは何かは、8〜15節で語られる。

8 その方 聖霊のこと。ここから11節までは、第一の益として、聖霊が地上に來られたとき「世の誤りを明らかになさる」ことが語られている。次の9〜11節で、罪、義、さばきについて詳しく語られる。

9 彼らがわたしを信じないからです 主イエスは、ユダヤ人たちにご自身が救い主であることを何度も語られたが、彼らは信じようとしなかった。後に、ペテロは聖霊が降られた後、ユダヤ人たちに説教し、彼らの罪を明らかにする(使徒2・36〜37参照)。

10 義について 世の代表であるユダヤ人たちは、自分たちの方が義である(正しい)と思ひ、主イエスを十字架につけた。しかし、聖霊は、主イエスが義であり、正しい方であることを証しする(使徒2・22、7・52等参照)。

11 この世を支配する者 悪魔(サタン)のこと。主イ

エスの十字架と復活により、悪魔は敗北した。やがて終わりの日に悪魔はさばかれる（黙示録12・9等参照）。

12 主イエスが「今」弟子たちに明らかにされないことを、後に聖霊が明らかにされる。そのことが13～16節で、第二の益として語られる。

13 真理の御霊 聖霊は、真理そのものである主イエスを人々に伝え、主の言葉を弟子たちに思い起させてくださる（ヨハネ14・26）。さらに聖霊は私たちが主イエスの戒めを守ることができるように働きかけられ、主イエスに栄光を帰せられる（ヨハネ16・14）。すべての真理 この場合の「すべて」は、主イエスご自身に関すること、主イエスの成される救いに関わるあらゆる真理という意味であろう。聞いたこと 父なる神から示されたこと。これから起こること 一義的には主イエスの死と復活と昇天のこと。さらにご自身の再臨のときの出来事も含むと受け止めることができる。伝えてください 「伝える」（ギリシア語）は、14、15節にも用いられている。起こった出来事やしたことを報告する、あるいは、先に言ったことや他人が言ったことを言い直す、という意味。口語訳では「知らせる」と訳されている。

14 わたしの栄光を現されます 聖霊は、主イエスにすべての栄光を帰せられる。わたしのもの 主イエスのことばや主の示される真理と解することができる。

15 父 父なる神。父が持っておられるものはすべて、わたしのもの 父なる神が御子イエスに天地のすべてを預けておられる。やがて御子イエスは父なる神にすべてを渡される（マタイ28・18、Iコリント15・24等）。また「父の持っておられるもの」は「父なる神が伝えようとなさるご意志」でそれを御子イエスが伝えられるとも解することができる。

今回の目標は「聖霊に導かれて歩む者となる」であるが、「聖霊に導かれて歩む」ことは、聖霊が伝える主イエスと主を信じ、従う私たちとの関係（交わり）を抜きにしては語ることではない。

参考図書 榊原康夫『ヨハネ福音書講解・下巻』（小峯書店）、村瀬俊夫『ヨハネの福音書』『新聖書注解 新約1』（いのちのことば社）、他

聖書

エペソ5・6～14a

タイトル

光の子として歩もう

暗唱聖句

あなたがたは以前は闇でしたが、今は、
主にあつて光となりました。光の子ども
として歩みなさい。

目標

エペソ5・8
キリストによって光の子とされたことを
自覚し、光の中を歩み続ける。

導入

(和田牧子)

今日は教会カレンダーでは、花の日、子どもの日です。
いつもお世話になっている人たちにお花をもつて出かける教会もあるでしょうね。

「子どもは世界の宝物」とも言いますが、皆さんの元
気な笑い声、走りまわっている姿は、大人にとつても元
気のもとです。何よりも皆さんをこの世界に誕生させて
くださったのは神さまです。神さまは皆さんのことが大
好きで、皆さんのことをよろこんでおられます。

以前は闇だった!?

今日のみことばには「あなたがたは以前は闇でしたが」とあります。闇ってむずかしい言葉ですが、暗くて光が

ない状態の事です。え？ わたしたちが以前は闇だった？ ピンと来る人もあれば、よくわからない人もいるかもしれませんね。何が闇って、心の中が闇なのです。心の中が暗いのです。

もちろん私たちの周りにはいろいろな性格の人がいます。元気な人、おとなしい人、すぐ泣いちゃうよという人：どんなお友だちのことも神さまは愛しておられます。でも、どんな性格であろうと、どんな人であろうと、心の奥底にはかくれた闇があるのです。イエスさまに出会うまでは…。

神さまによるこぼれるきれいな心になりたいなと思っても、どうしても誘惑に負けてしまったり、悪いことをしてしまう。もし心の中がテレビの映像になってあらわれたら、さあ、どうしましょう!? 人には見せられないような恥ずかしい場面がいっぱい出てくるのではないでしょうか？ それが心の闇です。

光が心にやってきた!

でも心配ありません。今からおよそ二〇〇年前、皆さんの大好きなクリスマスに、イエスさまがこの世にお生まれくださいました。イエスさまは「わたしは世の光

です」と自己紹介されましたよ。イエスさまだけは、人間として生まれましたが、まったく罪のない、暗いところのない、光そのものな方だったのです。神さまがこの世に送られた救い主、神さまの御子だったから！

イエスさまのまぶしい光に照らされる時、わたしたちは自分の心がほんとうに暗いことがよくわかるでしょう。でもイエスさまはそんな私たちの罪をきよめるために、ほかでもないご自分が十字架にかかって、血をながし、死んでくださいました。イエスさまの十字架の血によって、私たちの心はきよめられ、暗いところのない光でいっぱいになったされるのです。

光の子どもとして歩もう

今日のみことばの続きには「今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい」とあります。「主」とは、イエスさまのことです。イエスさまにあってわたしたちもまた光となることができました。イエスさまは十字架で死なれただけでなく、三日目によみがえられ、今も生きておられる私たちの王さまなのです。ですから、いつも心にイエスさまをおむかえし、イエスさまに王さまとして治めていただくときに、わたしたちは光

の子どもとして歩み続けることができます。

私たちは弱くて、ついつい誘惑に負けてしまいやすい者です。だからこそ、いつも私たちのことを想い、愛し、いっしょに歩いてくださるイエスさまのことを忘れないことが大切なのです。イエスさまが光ですから、イエスさまといっしょにいさえすれば、イエスさまが輝いてくださいます。無理をしてきよいふり、良い人のふりをする必要はないのです。

結び

「光は実を結ぶのです」(9)というみことばもあります。実を結ぶとは、小さな種のような存在がどんどん成長して、よい実をみのらせることです。私たちの人生やいのちは、わたしたち自身だけのものではありません。イエスさまがわたしたちを照らし、わたしたちの光となってくださいますから、わたしたちをとおして周りの家族やお友だちにもその明るさが広がっていくことしましょう。光の子となる鍵は、すべてイエスさまです！

♪光は勝つ♪(イッピー・ジャパン)

聖書 エペソ5・6・14a テーマ 光の子として歩みなさい

序論

(宮澤清志)

今から三〇年ほど前、私が教会学校の教師として奉仕していた折、今日の中心聖句から好んで用いられていた讃美歌の一節です。

ひかりひかり わたくしたちは
ひかりのこども ひかりのように
あかるいこども いつもあかるく
うたいましょう (こどもさんびか 52番)

キリスト者にとって「光」は「明るさ」「いのち」といった、生命的なイメージを持っているのではないのでしょうか。すべての生命の源はこの「光」から来るのです。

一、光の子どもとは

「光の子ども」とは、聖書では「光に属する子」あるいは「光の性質を受け継ぐ子」といったような意味があるでしょう。そこには、光であるキリストのご性質を受け継ぐ者としての意味合いがあります。

私たち人間は、「神の似姿」(創世記1・26)として創造されました。人間は神との交わりの中にある存在として、神の光の中を歩む存在として造られたのです。そこには光があります。神の光の中にある存在として、私たちは存在し続けるはずでした。

しかし、アダムの子以来、人は神との交わりから離れ、罪と暗闇の中を歩む者となりました(8)。

では、この「暗闇の生活」の中にいる私たちが、どのようにして「光の子どもとしての歩み」へと変えられることができるのでしょうか。

二、暗闇のわざを捨てること

エペソ人への手紙の中にはこの「暗闇のわざ」について、「淫らな行い」「汚れ」「貪り」「わいせつなこと」「悪かなおしやべり」「下品な冗談」などと列挙されています(エペソ5・3・4)。もちろんこれらはパウロが列挙した「暗闇のわざ」の一部であり、他の箇所でもこのような暗闇のリストは列挙されています(例えば1コリント6・9・10、ガラテヤ5・19・21など)。これらのわざは、人の心の奥に隠され、他の人には知られることはありません。

ません。罪の中にある人々は、これらのことを隠れて行うのです。

しかし、たとえ人の目から隠されているとしても、神の目には隠されてはいません。このようなことを行う者たちは、キリストと神との御国を受け継ぐことはできないのです(5)。そして、その行き着く先は、神の怒りなのです(6)。これらの「実を結ばない暗闇のわざ」(11)に加わってはなりません。

三、光の子として歩むこと

光の子として歩むには、消極的な側面として「闇の生き方を捨てること」が挙げられます。しかし同時に積極的な面では「光の子として生きること」が必要です。光は植物の成長にとってなくてはならないものです。同様に、光は信仰者の成長にとってなくてはならないものです。

キリストの光に照らされた人の歩みは、先程の「罪のリスト」とは異なる行いをとります。すなわち「感謝のことば」(4)を語ること、「あらゆる善意と正義と真実」を行うこと(9)です。「感謝」「善意」「正義」「真実」

という実を結ぶことが、光の子として歩む者の結果だというのです。

では、これらの実を結ぶために、私たちはどうすればいいのでしょうか。それは、「実を結ばない暗闇のわざを、明るみに出すこと」(11)です。光の子どもとして歩みたいと願うならば、自分の内にある隠されている部分、暗闇を、明るみに出し、光に照らしていただくことが必要です。そして、その暗闇に気づかせていただくことです。

結論

あなたは、キリストの光に照らされているでしょうか。それとも、いまだ暗闇の中を歩んでおられるでしょうか。もちろん、暗闇の出来事を明らかにすることは痛みが伴います。恥ずかしいこともあるでしょう。しかし、キリストの光に照らされるためにはその痛み、苦しみは避けて通ることはできません。キリストは、あなたの痛み、苦しみを負って十字架へと進んでいかれました。それは、私たちを愛するがゆえです(2)。愛されている子どもとして、光の子として歩んでいきましょう。

研究資料

(辻林和己)

この章では、「古い人」を脱ぎ捨て(4・22)、「新しい人」(4・24)を着たキリスト者にふさわしい歩み(生活の仕方)について語られている。

パウロは1〜5節で、「神に倣う者」となり、聖徒にふさわしいきよい歩みをすることを命じている。3〜4節では、特に性的不品行や下品な言行を戒めている。貪る者(5)は肉の欲望に支配されている者。

今回の箇所では「光の子ども」としての歩みについて記されている。

テキスト

6 空しいことば 「空しい」の原語〔ギ〕ケノースは、「空虚な、真理の内実のない」という意味の形容詞。**神の怒り** 神は人の罪や不義に対して怒りを持つておられる。ローマ1・18、エペソ2・3等、参照)。

7 彼ら 5節の「偶像礼拝者」を指す。**仲間** 「仲間になる」は深く関わることを意味する。

8 闇 神との交わりを持たず、罪の中にいる状態(エ

ペソ2・1〜3)。**光** 「主にあって」とあるように光である主イエスにより罪から救われた者は、主からの光をいただいて自らも光とされる(ヨハネ1・4〜5、9、8・12、マタイ5・14〜17等)。**光の子ども** 「の子」は「に属する者」や「の性質を受け継ぐ者」という意味のヘブル的表現(2・2、5・6参照)。よって「光の子ども」は、光であるキリストに属する者、キリストの性質を受け継ぐ者、の意。

9 光は実を結ぶ 原文には「結ぶ」という言葉はなく、「光の実」(単数)となっている。英訳聖書の中には「聖霊の実」との訳もある。光であるキリストに結ばれた「光の子ども」であるキリスト者は、聖霊により、「善意と正義と真実」の心が内に与えられ、それらが具体的な行いとなって現れる(2・10、ガラテヤ5・22〜23参照)。

10 何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい 「光の子どもとして歩む」ための具体的な指示の第一がこの節に記されている(5・17、ローマ12・1〜2参照)。「吟味する」〔ギ〕ドキマゾーは、口語訳では「わきまえ知る」新改訳第三版では「見分ける」。原語では、分詞形が使われていて原文は11節につながっている。「キリスト者の

實際生活の基準は、ただ一つ、主をお喜ばせることは何か、に尽きる。」(小畑進「エペソ人への手紙」『新聖書注解2』(いのちのことば社))

11 暗闇のわざ 罪の行い。この節は10節に続き、第二の具体的な指示が記されている。明るみに出す「ギ」エレグコー。「明るみに出しなさい」は「責めよ」(文語訳)、「指摘してやりなさい」(口語訳)と訳されている。

12 原文の初めには前節の理由を示す前置詞「ギ」ガルがある。新改訳2017、口語訳では省かれている。新改訳第三版では「なぜなら」と訳されている。

13 明るみに引き出され、明らかにされます 11〜12節に記されているような罪の行いが、キリストの光によって照らされる。それによって「不従順な子ら」(6)は悔い改め、信仰に導かれ、光の子どもとされる。その救いのみわがが成されるのは、主イエスの十字架の贖い(5.2)と聖霊のお働きのゆえである。

14 明らかにされるものはみな光だからです 8節前半と同じ内容が言い換えられている。主イエスの光に照らされて自らの罪が明らかにされる。それを認め、悔い改めた者は、闇から光とされている。

(今回の個所に、14節後半は含まれていないが、参考のため以下に記す。)

14節後半の引用の出典については諸説あるが、当時の初代教会で歌われていた賛美歌の歌詞ではないかと推測されている。「眠っている人」、「死者」は、神を知らず、神との交わりを持たないで生活している人を意味しているのであろう。そのような人も、キリストの光に照らされるとき、罪が明らかにされ、悔い改め、信仰が与えられる。闇であった者がキリストにより光とされる。眠っている人は、復活されたキリストとともに起き上がり、新しく生きることができる。「起きる」、「起き上がる」の原語のそれぞれの動詞は「よみがえる、復活する」を意味する言葉でもある。

参考図書 F・フォールケス『ティンデル聖書注解 エペソ人への手紙』、奥田久良「エペソ人への手紙」『新実用聖書注解』(以上のいのちのことば社)、他

聖書

ガラテヤ4・1〜7

タイトル

神様の子どもとして

暗唱聖句

神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、
私たちの心に遣わされました。

ガラテヤ4・6

目標

神の子として、父なる神との親しい交わりの中で生きる。

導入

(和田牧子)

皆さんにとって「神さま」ってどんなイメージですか？
白い服を着て、白いおひげをはやしている？ 厳しい感じ？ やさしい感じ？ そう言われてみれば神さまって目に見えないから、イメージを聞かれても答えるのが難しいかもしれませんね。

主人と奴隷？

「はい、今から『船長さんの命令ゲーム』をします。船長さんの命令です。〇〇してください…と言われたらそのとおりにしてね。船長さんの命令のときだけ、その通りにするんだよ。」(出来たら実際ゲームをやってみましょう。)

いろいろな国で昔、「奴隷」という身分の人たちがいました。「船長さんの命令ゲーム」は楽しいですが、奴隷の人たちは一生、主人の言われるままに働かされる人たちでした。主人が「〇〇しなさい！」と言えばいつでもどこでもその通りにしなければなりません。人ではなく物のように扱われていたのです。時にはお金で知らない人に売られてしまうこともありました。皆さんがそんな立場だったらゾッとしますね。

神さまを信じていても「神さまって、奴隷をこきつかう主人のようだ」と思ってる人が聖書の中には出てきます。神さまの言うとおりにしないと罰せられる!! とビクビクし、おきてを守ることばかり考えている人たちがいたのです。自分がそうなので、周りの人にも「これをしてはいけない」「あれをしてはいけない」と厳しくなります。心に自由やよろこびがありません。

私たちはどうでしょうか。神さまはきびしいお方？ 近づいたら危険？ 私たちの小さな罪も見のがさず、ビシビシ罰することを望んでいる方なのでしょうか？

私たちのお父さん！

いいえ、そうではありません。神さまは私たちのこ

をととっても愛しておられます。私たちと親しくお話ししたり、いつも一緒にいたいと願っておられるのです。

それなのに私たちは神さまに背を向けてしまう罪深い者です。自分では神さまによるこばれるきよい人になりたいと思っても、どうしても罪の中にまいもどつてしまいます。そんな私たちを罪から自由にするために、神さまは何と、御子イエスさまをこの地上に送られたのです。私たちが罪にしばられてがんじがらめにならないために愛する御子イエスさまを十字架にかけて下さいました。

イエスさまが私たちのすべての罪を引き受けて十字架にかかって死んで下さり、血を流して下さいました。そのことによって私たちの罪はゆるされ、きよめられました。イエスさまの十字架、そして復活こそが、罪に打ち勝って自由になるただひとつの道だったのです。私たちはその神さまの大きな大きな愛と恵みを「ありがとうございます！」と感謝していただくだけでよいのです。

このように一方的な愛をいただいている私たちは、神さまのことを「お父さん！」「お父ちゃん！」と呼ぶことができます。イエスさまもまた「アバ、父よ」と叫びました。「アバ」とはユダヤの家庭で子どもがお父さん

を呼ぶときの呼び方です。

神さまの子として生きよう！

さらに神さまはイエスさまの霊である聖霊を送ってくださいました。私たちが「アバ！ お父さん！」と呼べるのは、聖霊が私たちのうちにいてくださるからです。このお方によって、これからずっと天のお父さまと親しくお話しすることができますし、神さまの子どもとして成長していけるのですね。ほんとうに神さまって、いたれりつくせりのお父さんですね！

天のお父さまは、とっても頼もしく、私たちをいつも見守ってくださいています。私たちがつらい時、悲しい時は慰めてくださいますし、助けの道を与えてくださいます。

時にはあれれ？　なんでこんな大変なことが起こるの？　と、真つ暗な道を歩いているような時もあるでしょう。そんな時でも、しっかりとした大人の人と手をつないでいたら怖くはありませんね。ましてや天のお父さまの手をしっかりと離さないで生きていくなら、これほど安心で確かな人生はありませんよ！

♪愛アイあい♪（イン66）

聖書 ガラテヤ4・1〜7 テーマ 神の子として

序論

(石田高保)

私たちが救われたとき、霊においていろいろなことが起こりました。罪が赦され、義とされ、神と和解し、神の子とされ、神の家族に入れられ、御霊の実と賜物をいただき、永遠の命を授けられました。しかしこれらのことをいっぺんに自覚することはありません。信仰生活が進むにつれて薄紙をはがすように理解が進むものです。

一、罪の奴隷

イエス様を心に受け入れると即座に神の子ともとされます。ちょうどお母さんのお腹から生まれるとき、間髪を入れずに人生を始めるようなものです。クリスチャンが新しく生まれるわけですが、生まれる前の人生もありました。この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました。私たちが救われる前は悪魔に支配され、その奴隷となっていたということです。罪の奴隷ということは罪を罪とも思わず、罪を犯したくないと願ってもそれに抵抗することができません。まさに悪魔の言いなりだっ

たわけです。外見がいかに真面目で人受けが良かったとしても、心の中では人知れず罪によって良心が痛むものです。「私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです」(ローマ7・15)、これは私たちの偽らざる告白です。道徳的に何が正しいことを熟知していたとしても、それを行う力がありません。してはいけないことはよくわかっていても、それを避ける力もありません。しかし私たちは聖霊の力によって正しいことを行うことができ、罪を犯すことを避けることができます。神の子ともとされていることの賜物です。

また神の子であるならば、その相続人であります。ローマ法においては、相続人は全財産の持ち主なのに、成人するまではそれに指一本触れることができません。その点においては奴隷と同じです。そのように「私たちも、子どもであったときには、この世のもろもろの霊の下に奴隷となってい」たわけです。

二、神の子

そんな私たちを解放するために、しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にあ

る者として遣わされました。先祖アブラハムから二千年後、神の 때가満ちてイエス様がマリアから生まれましました。主は天地創造の前から神としておられた方ですが、神様の救いのご計画に従って世に現れました。主は33年の生涯で、律法を一つの例外もなく守り、救いを完成する資格を獲得されました。主が万に一つでも律法を破れば、救い主の資格は剥奪されたでしょう。イエス様以外の人類は、だれ一人として罪を犯さない生涯を送ることはできません。ですからどのような聖人君子でも救い主になる資格はないわけです。全世界、全時代の人類の中でイエス様がただ一人救い主となることができたのです。(それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした)。

このようにしてイエス様は十字架で救いの道を開かれ、信じた者に神の子という身分を授けられました。主人の子どもと奴隷の違いは何でしょうか。子どもは父親から愛される存在です。いつばう奴隷は主人から支配されている存在です。私たちは罪の言いなりになる奴隷ではなく、罪から解放された神の子です。(そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の

御霊を、私たちの心に遣わされました)。私たちが神の子であることの証拠がどこにあるのでしょうか。その一つは内にいます聖霊によってお父様と呼ぶことにあります。私たちが天のお父様と呼びかけるとき、私たちは神の子であることを証明しています。ユダヤ人には神様に対してお父様と呼ぶなど畏れ多いことと考えていました。それは異邦人も同じです。ですからイエス様が神様のことを父と繰り返し表現したとき、ユダヤ人たちは神を冒瀆する者だと主を激しく非難しました。それはイエス様が自分のことを神の子であると宣言するに等しかったからです(主はご自分のことを神の子であると言ったことはありませんが)。弟子たちも神を父と呼ぶように教えられました(主の祈りしかり)。こんにち私たちも神様のことを父と呼びます。呼ぶだけではなく、神の相続人であることを宣言していることになるのです。

結論

神の相続人は神様からあらゆる祝福を受け継いでいます。それは地上の祝福にとどまらず、天に移され神の子として永遠に成長する祝福を受け継ぐことになっているのです。実に光栄極まることではないでしょうか。

研究資料

(小平徳行)

信仰者は、旧約時代も新約時代も同じ救いの約束による相続人である。ここでは新約時代の恵みの新しさが示されている。それはキリストが来臨され、御子の御霊を心に送ってくださった結果、神を「アバ、父よ」と呼んで礼拝することができる者とされた事である。

テキスト

1-2 ここでは相続人となる前後の相違に注目し、ローマの家庭における、未成年者の扱いに関する当時の慣習を引き合いに出して説明している。ローマ法によれば、相続人である子が14歳になるまでは、父親の定めた後見人のもとに置かれ、財産の管理の面では、彼が25歳になるまで管理者に一任された。子ども(キ)ネーピオス「未成年者」の意。律法の下にある者たちの状態は、相続人が未成年者である時の状態に他ならず、未熟で、自由がなく、むしろ束縛された者である。

3 もろもろの霊(キ)ストイケア) ももとはアルファベット文字を指していたが、そこから2つの意味を

派生するようになった。①宇宙を構成する基本的な要素(地、水、火、空気)を意味し、それが特に天体に宿る「諸霊力」としてヘレニズム世界において畏敬された。②アルファベットの学習のような「初歩的段階の教え」。8-11節から判断すれば「諸霊力」の意味に取れるが、ここでは律法の初歩的な性格が強調されていることからすれば「初歩的な教え」と取ることも可能。別訳として「幼稚な教え」とある。パウロはおそらく、迷信や律法主義などに束縛されている状況を憂い、両方の意味をこめて用いたのであろう。

4 女から生まれた者 神の御子が人間性をとって世に來られた事を指す。御子イエスを通して現れてくださった神は、遠く天上から私たちを眺め、指図されるお方ではなく、人となって、罪以外は、すべての弱さ、痛み、悲しみを私たちと共に背負われたお方である。律法の下にある者 御子が律法の支配下に生きることにより、律法の要求を引き受け、そののろいをもともに受けるために來られた事を強調している。遣わされました 生まれた時に初めて存在されたのではなく、先に存在されていたお方が世に遣わされたことを示している。

5 御子の派遣の目的が示されている。律法の下にある者を贖い出すため「あがなう」とは代価を払って買い

戻すことを意味する。私たちを律法ののろいから贖い出すために、主が支払われた代価は、ご自身のいのち（血潮）であった。子としての身分（ギ）フィオセシア）法律用語で「養子」のこと。パウロは養子縁組の制度を用いて説明している。ユダヤ人も異邦人も皆、キリストにある神の恵みによって子としての身分を受けるのである。

6 遣わされました この動詞の時制は不定過去形であり、私たちの心に、一回限りの出来事として聖霊が遣わされたのである。この賜物は養子を正真正銘の子にするために必要である。私たちの心に聖霊がおられることにより、私たちは神の子であることを確信し、信頼をもって祈ることができるのである。アバ 家庭内で子が父を呼ぶ場合に使われた日常的なアラム語。神に対する呼びかけに「アバ」が用いられる例は、ユダヤ教にはほとんどなく、むしろそれは避けられていた。神をこのように呼び始めたのはキリストである。そして、キリストは御霊により、私たちのうちにとどまって「アバ、父」と呼び続けさせてくれる。叫ぶ（ギ）クラゾー）ワタリガラ

スのような鳴き声の擬音語で「大声で叫ぶ」の意。「ことばにならないうめき」（ローマ8・26）のような、深い感情を表現する叫び。

7 子（ギ）ヒユイオス）「息子」の意。家族の中で奴隷と対極にある立場。1、3節の「子ども」とは異なり、相続人としての資格を持った成年である。したがって、この世のもろもろの霊や律法の支配下から完全に解放され、キリストにある真の自由が与えられている。したがって、ガラテヤの信徒が再び律法の下に戻ろうとするのは、成年から未成年へ逆戻りするような愚かなことであった。神とキリスト者は、主人と奴隷の関係ではなく、無条件の愛に根ざした親子の関係なのである。この「子」としての自由を失うことを、パウロは心配しているのである（11節）。神による相続人 キリスト者が相続人となるのは、神の主権的な恵みによることを強調している。

参考図書 宮村武夫『ガラテヤ人への手紙』『実用聖書注解』、村瀬俊夫『ガラテヤ人への手紙』『新聖書注解・新約2』（以上いのちのことば社）、藤本満『ガラテヤ人への手紙』（イムマヌエル綜合伝道団出版局）他

聖書

Iサムエル20・18～42

タイトル

愛の契約

暗唱聖句

私とあなたが交わしたことばについて

は、「主」が私とあなたの間の永遠の証人

です。

Iサムエル20・23

目標

主にあつて結ばれる絆の素晴らしさを知る。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは友達と互いの友情を確かめるような約束をしたことがありますか？ ある人は、お互いの小指を引っ掛けて固く約束を誓うこともあるでしょう。皆さんは人との約束を守るほうですか？ それとも…。約束を守るということは相手を大切にすることです。聖書には互いを大切にし合う愛の絆を見ることが出来ます。

ダビデとヨナタンの堅い友情

ダビデは非常に勇敢な人でした。それを見たサウルはダビデを王宮に呼び寄せて、彼を戦士の長に任命しました。ダビデはすべての兵士や、サウルの家臣達にも喜ばれました。ある時、イスラエルのあらゆる町の女性達か

喜びの声を上げてサウル王を迎えましたが、彼女達は「サウル王よりもダビデの方が多くの敵を倒した」と歌いました。これを聞いたサウル王は大変怒り、ダビデをねたむようになりました。そして、ついにダビデを殺すように息子のヨナタンとその家来達に命令したのです。しかし、ヨナタンはダビデにサウル王の計画を話しました。そしてヨナタンはサウル王に「ダビデを殺さないように」と説得をしました。サウル王はそれを聞き入れましたが、やはりダビデを殺そうとしたのです。ヨナタンはダビデと一緒に野原に出て、ダビデを守る事を約束したのです。ヨナタンはダビデが命を狙われているにも関わらず、ダビデから逃げようとしませんでした。ダビデを守ろうとしたのです。何という堅い友情でしょうか！

2人を結び合わせたもの

ダビデとヨナタンを強く結びつけたものは何だったのでしょうか。2つ見ることが出来ます。

1つは愛です。ヨナタンの心はダビデの心に結びつきダビデを自分自身のように、また自分の大切な物を与えるほどまでに愛していました（Iサムエル18・1）。ヨナタンはダビデを愛しているからこそ、ダビデが守られる

ように一生懸命に努力をしたのです。皆さんも友達が本当に好きで大切にしているなら、友達が困っている時にそれを黙って見てはいられないでしょう。「助けてあげたい!」と思うに違いありません。ヨナタンとダビデは愛によって強く結ばれていました。愛って素晴らしいですね。

もう1つは主です。ヨナタンはダビデを守るために彼と契約を結びました。契約とは約束よりも強い言葉です。彼らは2人の友情契約を確かめたのです。ヨナタンはダビデに、「あなたを無事に逃がさなかったなら、【主】がこのヨナタンを幾重にも罰せられますように」(13)と誓っています。更に「私とあなたが交わしたことばについては、【主】が私とあなたの間の永遠の証人です」(23)と言いました。ヨナタンはダビデとの友情関係は必ず主が守って下さり、関係は崩れないと信じていたのです。

神さまと私たちとの愛の契約

ダビデとヨナタンの関係は本当に素晴らしいですね。彼らは愛と主にあって強く結ばれていました。それと同じように神様も私たちとしつかりとした関係をもってく

だします。それは、愛とイエス様によつてです。神様は私たちを本当に愛してくださっています。ですから、いつも私たちの事を見守り支え、助けてくださいます。そして、神様はイエス様の十字架によつて、私たちの関係を強くくださっているのです。イエス様の十字架の血は「私の罪のためだった」と私たちが信じた時に、神様は私たちの罪を赦し、新しくしてくださいました。そして、神様は私たちの神となってくださり、私たちを神の子とくださったのです。神様は「私は絶対にあなたから離れないし、見捨てることはしないよ」と契約してくださっています。神様と私たちの間に常にイエス様がいてくださって神様との契約をイエス様が守ってくださっているのです。

まとめ

神様と私たちとの愛の契約は、神様の大きな愛とイエス様によつて強く守られています。イエス様を信じ続けて神様との絆を強くしていただきましょう。

♪どうしてわかるかな♪ (ホ61、ふ4、PW99)

聖書 Iサムエル20・18〜42

テーマ 愛の契約

序論

(鎌野善三)

18章から今週の20章までは、次のようにまとめられるだろう。ダビデの名声が高まるにつれて、サウル王は不安になってくる。そして王位が彼に移ることを恐れて、彼を殺そうとしたのである。でもヨナタンがいさめたので、一度はその思いを改めたのだが、やはり殺意を消すことはできなかった。そこでヨナタンとダビデは先に結んだ契約を確認し、王の真意を探る一計を案じたのだ。ヨナタンはダビデの命を守ろうと必死だった。ここでも、「ヨナタンは、自分を愛するほどにダビデを愛していた」と述べられていることに注意していただきたい(20・17)。今週のテキストには、サウル、ダビデ、ヨナタン、三者三様の思いが記されている。

一、サウルの思い

サウル王の娘ミカルと結婚していたダビデは、たといこのような状況でも〈新月祭〉には、家族の食事会に出席せねばならなかった。その席に無断で欠席するなら

王はどのような態度を取るか。それによって王の真意がわかると、二人は考えた。ヨナタンはその結果をダビデに報告すると約束し、ダビデは荒野に身を隠したのである。最初の日は何も言わなかった王だったが、二日目にも来ないことがわかったとき、王は非常に怒って「あれは死に値する」と叫んだ。

〈エッサイの子(ダビデ)がこの地上に生きているかぎり、おまえ(ヨナタン)も、おまえの王位も確立されないのだ〉というのが、サウル王の思いだった。イスラエルは神の支配される国であることを忘れ、自分の国、自分の息子が受け継ぐべき国と思いこんでいた。最初、サムエルから油を注がれた時、荷物の間に隠れていた謙遜さ(10・22)は、もはやこの時には失われていた。王権は彼を傲慢にしたのである。

二、ダビデの思い

ダビデは、サウル王から王位を奪い取ろうなどとは考えもしなかった。だから命をねらわれたとき、何の防戦もせず、サムエルのもとに逃げ込んだのだ(19・18)。そこで自分が少年の頃、サムエルから油を注がれたことを思い起こしたかもしれないが、自分から進んで王になる

うとは夢にも思わなかっただろう。だからサムエルのもとから帰ってきてても、ヨナタンに「主」に誓って、しもべと契約を結んでくださったのですから(20・8)と言って、王の息子に仲介を求めたのである。

ここで「契約」はダビデにとって新しい意味をもつようになった。王の息子が自分の命を救ってくれる立場にある。その息子が「自分を愛するほどに」、ダビデを愛すると約束してくれた。これこそ「愛の契約」と言うことができる。ダビデはヨナタンとの愛の契約を信じて、王の怒りから逃れようとしたのである。ヨナタンに主イエスの姿を感じるのは、行きすぎた解釈だろうか。

三、ヨナタンの思い

ヨナタンは、ダビデの思いを十分に理解していた。そして、彼を救い出すことを確証するために、「主」が私とあなたの間の永遠の証人です」と、主にあつて結ばれた契約は必ず守られると断言した。案の定、サウルは怒り狂ったが、(なぜ、彼は殺されなければならないのですか。何をしたというのですか)と、父が自分に槍を投げつけても、ダビデのためにとりなしをしたのである。そして約束どおり、このことをダビデに知らせ、二人は口

づけし、抱き合つて泣いた。

ヨナタンは、父が自分に王位を譲りたいと思つてゐることは百も承知だった。しかし、ダビデこそ次の王となるべき人であると察していたに違いない(たとい、ダビデから少年時代の油注ぎのことを聞いていなかったとしても、20・15-17にそのことが暗示されている。来週学ぶ23・17にはそれが明確に示されている)。父とダビデのはざまに立つてヨナタンは苦しんだ。しかし、肉親のつながりにではなく、主にあつて結んだ契約に従うべきだというのが、ヨナタンの思いだった。

結論

ヨナタンとダビデの間に結ばれた契約は、主イエスが人を愛し、その愛のゆえに父なる神の怒りをなだめられたことを、部分的に表しているように思える(もちろん、神の怒りはサウルのような理不尽なものではない)。私たちは、そのような愛の契約の中にあることを心から感謝しよう。また、友のために犠牲となるような友情をはぐくもう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

18→23 ダビデとヨナタンが公に会うことはもはや安全でなくなった。そこでヨナタンは野に隠れているダビデに、サウルの本心を伝えるために手の込んだ計画を立てた。**新月祭** 陰暦を用いる古代イスラエルでは月相が新月となるついたちを祭の日として祝い、王がこの祭で重要な役割を果たした(エゼキエル45・17参照)。それゆえその祝宴に出席することは、非常に重要なことであった。

【主】があなたを去らせるのです ヨナタンを通してサウルに伝えられた言い訳の中では、ダビデが王の祝祭を欠席することを許したのはヨナタンとなっているが(6、29)、そのことを含め、すべては主の許しの中で行われるのだとヨナタンは証しする。【主】が私とあなたの間の永遠の証人です この契約を保証されるのは主だとの宣言。アブラムとの契約で、裂かれた犠牲の間を神をあらわす炎が通ったように(創世記15・17)、ダビデとヨナタンの間には神がおられた。

24→29 場面は王宮における新月祭の食卓となる。もち

ろんそこにダビデの姿はなかった。思わぬことが起こって身を汚したのだろう サウルはダビデの不在を宗教上の不浄のためと推測し、何も言わなかった。漏出物や死体といった不浄なものと接触した者は、汚れた状態のままでは、祭儀への参加を許されなかったからである(レビ11→15章参照)。しかしサウルの推測は、欠席の理由としては一日しか通用しなかった。そこで翌日サウルはヨナタンに問いただした。**氏族の祝宴がその町であります** 6節には「年ごとのいけにえを献げることになっている」とある。エルカナの一家も年ごとに犠牲をささげた(1・3)。サムエル記の時代、この祭は一族にとって非常に重要な行事であったので、ダビデがサウルの祝宴を欠席するためのもつともない訳となり得た。

30→31 サウルはヨナタンに怒りを燃やして サウルの怒りは、最初はダビデに対してではなくヨナタンに向けて爆発した。王を差し置いてダビデに欠席を許す権威はヨナタンにはなかった。18・1の〔心〕カーシヤル(心を結ぶ)は「同盟を結ぶ」から転じて「共謀する」までをも意味する語であるが、ここにサウルは後者の意味をかぎつけるに至ったのである。おまえがエッサイの子に肩入

れし 一方を選択することは、他方の拒絶を意味する。

神がダビデを選び、サウルを拒んだことはもちろんサウルにとって大きな打撃であったが、その選択と拒絶が自分の息子によってもなされたということは、甚だしい屈辱であった。16・14に「主」の霊はサウルを離れ去り」とあるが、それは非日常的なことばかりでなく、人間の愛情や離反といった日々のドラマの中にも表れてくることなのである。おまえも、おまえの王位も 息子に王位を継がせたいと願っていたサウルにとって、その実現のためにはダビデの存在が邪魔であった。しかしダビデに忠誠を誓うヨナタンにとっては、父が与えたいと願う偉大な贈り物は取るに足りないものであった。

32〜34 サウルは槍をヨナタンに投げつけて撃ち殺そうとした ダビデを擁護するヨナタンの問いかけに対して、サウルは槍をもって答えた。今やヨナタンは父の本心を決定的に悟るに至ったのである。

35〜40 ヨナタンは計画したとおりに、子どもを連れて野に出て行った。そしてダビデが合図を聞き違えないように、はっきりと子どもに指示を出した。早く。急げ。立ち止まっていけない 子どもが間違った方向に行っ

てダビデを見つけることがないようにとの配慮から出た指示だと考えられる。

41〜42 矢を用いた一連の計画は結果から見れば不要であったとも言える。二人は結局、顔を見合わせて会話をすることができたからである。ここで二人は主にある友情を再確認し、別れを惜しみながらも、それぞれの道を進んで行くことになる。しかし離れていても、二人の間におられる主によって二人は結び合わされているのである。私の子孫とあなたの子孫との間の 「私とあなたとの間の」(23)からさらに進んで、子孫にまで言及した内容となっている。それはダビデに自分と子孫への「恵み」を求めるヨナタンの切願(14〜15)を反映したものである。今ダビデが置かれている現状は、油注ぎによって約束された将来像からは、遠くかけ離れているように思える。しかし変わることはない主の計画がダビデの将来のために用意されていることを、ヨナタンはその霊的敏感さによって知っていたのである。

参考図書 注解書 Hertzberg (Old Testament Library), Klein (Word), ブルッゲマン (現代聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

二〇二二年度 カリキュラム解説

今年度は、二〇二〇昨年度から始まった三か年カリキュラムの3年目になります。旧約聖書は3年かけて、原則として歴史順に学び、新約聖書は各年、いずれかの福音書を中心にイエス様の生涯を一通り学ぶことができます。その他、教会暦や行事に合わせたカリキュラムも盛り込んでいます。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、「サムエルとダビデ」に始まる王国の歴史を取り上げ、捕囚期に至ります。また8月～9月にかけては、エリヤ、エリシヤ、ヨナ、エレミヤといった預言者を取り上げます。

②新約聖書

新約聖書は、ルカの福音書を中心に「キリストの譬え」、「キリストの十字架への道」を学びます。また秋には使徒の働きに見る「教会の歩み」を、また1月には「新しい生き方」というテーマを扱います。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

今年度のイースターは4月17日ですので、カリキュラムは「十字架」から始まります。年末からは「クリスマス・年末」、年度末には「キリストの十字架への道」が置かれ、翌年度の受難週に続いていきます。

④テーマ「光の子として生きる」(ヘブ15:8)

今年度のテーマは「光の子として生きる」です。「造り主なる神を知」(二〇二〇年)り、「救い主と出会」(二〇二一年)った子どもたちが、神様の愛の光の中で、輝きに満ちた喜びの生涯を歩むことができるようにと願っています。

なお、「カリキュラム」は教会教育室ホームページからダウンロードしていただけます。また、「ワーク(A～C)」、「子ども聖書日課」、「中高科へのヒント」、「み言葉カード(カラー、主要5訳対応)」、「フラッシュカード(白黒、カラー)」を無料でダウンロードしていただけますので、ぜひご利用ください。

おわりに

『牧羊者』二〇二二年度Ⅰ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は天授ヶ岡教会の内田純師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇六年度Ⅲ巻に掲載された鎌野直人師の原稿を一部編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」はお休みしました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

*分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。

信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

*ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

メッセージ例

聖書講解

研究資料

ワーク(A)

(B)

(C)

中高科へのヒント

子ども聖書日課

フラッシュカード

み言葉カード・イラスト

ワークプロ打ち込み

校正

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントパックに心から感謝いたします。(中島啓一)

後藤 真師 土屋開夫師 飯田勝彦師

今田雅子師 櫻井めぐみ師 和田牧子師

小泉 創師 宮澤清志師 石田高保師

福井文彦師 水川武志師 鎌野善三師

宮澤清志師 金井由嗣師 辻林和己師

小平徳行師 中島啓一師 宇野真佑美師

鎌野 幸師 吉田美穂師 石川剛士師

山下大喜師 勝田幸恵師 八幡直人師

竹崎光則師 野勢かほる師

上森恭子師 田中裕明師

勝田幸恵師 石田高保師 三輪正見師

後藤健一師 金田ゆり師 田中愛子師

小野淳子師 後藤栄子師 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 丹羽 遥姉

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二二年度 Ⅰ巻

二〇二二年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

印刷所 株式会社プリントバック

電話 (078) 575-5511

FAX (078) 575-1661

*聖書新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会許諾番号4-2-750号